

多文化共修科目 4年目の振り返り

～文化理解の変容に着目して～

岡 智之

(留学生センター)

1. はじめに

2015年度に始まった本学の「多文化共修科目」も4年目を迎えた。4年目の春学期を終えたこの時期に、あらためて4年間の振り返りと今後の課題を打ち出していきたい。異文化理解とは何か、多文化共生とは何か、学生と共に考え、歩んできた4年間であるが、特に、ヒューマンライブラリーとの連携によって文化理解の変容が生まれたように思う。異文化理解や多文化共生とは、単に人種、国籍、民族、言語などによるいわゆる外国人の文化にとどまらない、障がい者やセクシュアリティなどの多様性の理解を含めて考えなければならないということである。

2節では、この間の「多文化共修」をめぐる全国の動きについて概観する。3節では、この4年間の多文化共修授業について、大きく振り返る。4節では、特に2018年春学期の授業、課外活動などを学生たちのレポートなどを紹介しながら詳しく振り返る。5節では、多文化共修科目と連携したヒューマンライブラリーの活動と意義について振り返る。6節では、今後の異文化理解、多文化共生教育、多様性理解の教育に向けた課題について、まとめる。

2. 2015年～2018年の「多文化間共修」をめぐる全国での動き

2015年度までの「多文化間共修」をめぐる動きについては、岡(2016a)でまとめ、岡(2016b)でも発表したので参照していただきたい。その後の大きな動きとして、2017年2月に多文化間共修を主題にした著作、坂本・堀江・米澤(2017)『多文化間共修』が発刊され、2017年度異文化間教育学会第38回大会の公開シンポジウムとして「東北大学グローバルイニシアティブセミナー 国際共修—留学生と国内学生の学びあいをデザインする—」が開催された。(報告記事が末松(2018)にある。)また、2018年度異文化間教育学会第39回大会では、ケース/パネル発表として「留学生と共に学ぶ国際共修—効果的な授業実践へのアプローチ—」が行われた。以下、簡単に紹介する。

坂本他(2017)では、第1章で、多文化間共修の背景・理念・理論的枠組みが考察され、以下、オーストラリアの大学、北海道

大学、東北大学、名古屋大学、立命館大学、立命館アジア太平洋大学の事例が紹介されている。

まず、多文化間共修を「文化的背景が多様な学生によって構成される学びのコミュニティ(正課活動及び正課外活動)において、その文化的多様性を学習リソースとして捉え、メンバーが相互交流を通して学び合う仕組み」と定義している。

次に、多文化間共修の背景と意義について、現在、日本各地で大学の国際化を推進する取り組みとして、受け入れ・派遣留学生の量の拡大と質的向上がめざされてきているが、多文化間共修も、この延長線上に位置づけられ、多文化間共修の機会を提供することで、国際化によって拡大される教育機会を、より広く一般の学生も享受できる仕組みとしようとしている。全ての学生を留学させるというのは、理想的だが、様々な制度的制約から限度があると考えられる。そこで、全ての学生を対象にした、キャンパス内における国際教育プログラムの開発(「内なる国際化」)が求められるのである。これによって、学生の異文化に対する感受性や対応能力を高め、文化の多様性を理解し、グローバル化に対応するスキルを育成するといった国際教育の趣旨を反映させることが可能となるとしている。

多文化間共修の目的として、いわゆる「異文化間能力の育成」があげられる。異文化間能力とは、どの文化であるかに関わりなく、多文化/異文化環境において社会的な役割や自己実現を果たすために必要な認知的・情緒的・行動的スキルの総体であるとしている。異文化間能力の最終地点としての「適応」の段階においては、多様な異文化接触状況の経験を経て、「文化が異なる」ということについてのより複雑な概念理解と高い感受性を持ちつつ、あらゆる場面において適切に自分の認知面・情緒面・行動面を調整することができるとともに、新たな状況において常に学び続ける姿勢を保つ。また、こういった知識やスキルを持って、社会に貢献しようとする行動力やリーダーシップ力を同時に発揮できることも特徴とされている。坂本他(2017)では、大学教育の文脈においては、こうした異文化間能力を獲得するプロセスに意識を向け、学習者自身が自立的にそのプロセスを経験

することに重きを置きたい、という筆者の考えが示されている。

最後に多文化間共修の課題として、多文化間共修環境における「文化的多様性」の捉え方をさらに柔軟かつ広がりを持たせ、人の文化的アイデンティティのもつ複雑さへ気づきを高めることを第1点目として挙げている。文化的多様性とは、国籍の多様性だけではなく、人種・年代・出身地・性別・ジェンダー・性的志向性・社会階級・民族・言語・職業・趣味・過去の体験などといったより複雑な要素が混じって形成されるものである。こうした多様性への気づきと共に、多文化環境における個性の発揮と尊重が主眼となるような取り組みが想定されるとしている。

このような、多文化間共修の全国的な動きと様々な活動事例は、本学の多文化共修科目をデザインするうえでも非常に参考になった。そのうえで、稿者のスタンスとして、単に、異文化間能力の育成というようなものを目標とするだけではなく、様々な社会の問題解決に役立つような「現場生成的な」あるいは「現場変革的な」場として、この授業を位置づけていきたいと考えている。

3. この4年間の多文化共修科目の振り返り

この4年間、多文化共修授業を担当することを通して、自分の活動範囲や、視野が大いに広まったと考えている。2015年度春学期の振り返りは岡(2016a)でまとめたが、まず、4年間の受講者数、授業のトピック、課外活動、プロジェクト(最終発表)テーマなどを大きくまとめていきたい。

3.1 受講者数の推移

表1 各学期ごとの受講者数

学期	日本人学生	留学生(国籍)	総計
2015春A	17名(2年生以上3名)	19名(中国、台湾、韓国、ベトナム、カンボジア、タイ、スウェーデン、ドイツ、ポーランド)	36名
C	21	19	40
2015秋B	9名	17名(中国、ウズベキスタン、イラン、エストニア、カンボジア、タイ、スウェーデン、トルコ、フランス)	26名
D	2	20	22
2016	3名	11名(中国、韓	14名

春A		国、ドイツ、ベトナム)	
C	24	10	34
2016秋B	5名(うち4年生聴講1)	3名(中国、ドイツ)	8名
D	5	3	8
2017春A	3名	3名(中国、韓国)	6名
C	12	12	24
2017秋B	3名	4名(中国、タイ、スウェーデン、)	7名
D	7	18	25
2018春A	15名(うち4年生聴講1)	5名(中国、韓国)	20名
C	45	19	64

各学期の受講者数は、表1のとおりである。多文化共修科目A「異文化理解とコミュニケーション」、B「多文化社会とコミュニケーション」は稿者が担当、C「世界の言語と文化」(2015~2017 斎藤、2018 伊能)、D「世界の民族と文化」(2015 佐伯、2016~2017 有澤)は他の留学生センター教員の担当である。受講者は、2015年度春が日本人学生17、留学生19、計36名で、留学生が若干多かった。36名は6名グループが、6つできる範囲であり、プロジェクトをやる授業としては、人数の限界かと思われる。当初の想定としては、日本人15、留学生15程度を適正として受講制限を考えていたが、若干多めになった。日本語だけでやる科目のため、留学生は日本語レベル1,2に限定したつもりだったが、3レベルの学生も数名入っていたので、学生もやりづらいうところがあったようである。2015年秋は、日本人9、留学生17で留学生が倍近くになったが、人数としては適正であり、一番国際色豊かな授業となった。

それ以降、2016春14(日3、留11)、2016秋8(日5、留3)、2017春6(日3、留3)、2017秋7(日3、留4)と年々、受講者数の減少が見られた。この要因として、月1や木1に、他の共通科目や、専門の日本語科目が入っているという時間割上のことが考えられると思い、2017年は、月2、木2に時間を変更したのだが、改善が見られなかった。他の教員の共修科目の授業は、2016年以外は、いずれも20名以上の受講者がいることを考えると時間上の問題だけではなく、授業内容での問題があるのではということも考えられるが、要因はまだよくわからない。2018年度春は木5限にしたところ、20名(日15、留5)と人数が回復したが、まだ留学生数が少ないので、受講者確保のため今後何らかの改善が必要であると考えられる。

3.2 授業のトピック、ゲストスピーカー、課外活動

授業のトピックとしては、学期によって異なるが、大きく、次のようなトピックを扱った。

1. オリエンテーション 自己紹介、他己紹介
2. 在日外国人問題全般と留学生問題
DVD「となりに生きる外国人」視聴
3. 在日コリアン問題
4. 在日ブラジル人問題
5. 難民問題—クルド人、ロヒンギャ
6. 沖縄基地問題
7. 言語教育の問題
8. グローバル化の問題
9. 障がい者の問題 (ゲストスピーカー春「ろう文化と手話」、秋「見えない世界のコミュニケーション」)
10. セクシュアルマイノリティ問題 (ゲストスピーカー「トランスジェンダーの歴史と当事者運動」)
- 11.12 プロジェクト構想、発表準備
- 13.14. 最終発表
15. 授業の振り返り

授業の中で、ゲストスピーカーとして、障がい者(聴覚、視覚)は、毎学期入れていたが、2018年春に初めて、クルド人とトランスジェンダーのスピーカーを迎えた。授業中のDVD鑑賞としては、在日外国人理解のための『となりに生きる外国人』、グローバル化の理解のための『幸せの経済学』、沖縄基地問題理解のために映画「戦場ぬ止み」、難民問題の動画、ニュース特集番組などを随時視聴した。

課外活動としては、毎学期、朝鮮大学校訪問・交流の活動は継続した(2016秋のみ朝鮮大学校学園祭訪問)。ブラジル人学校訪問は、2015春は群馬県大泉町、2016春は太田市に行ったが、2017春は、ブラジル人学校の生徒が本学に入学し、交流を行った。2017秋は訪問を計画していたが、希望する学生数が少なく、中止にせざるを得なくなった。2018年春は、初めて、ロヒンギャ難民集住地の群馬県館林市を訪問する課外活動を行った。また、春学期は国際交流合宿の参加、(2015年秋のみ多文化交流合宿)、2016年秋学期からは、ヒューマンライブラリーの参加を課外活動とした。また、留学生センター講演会として、2015年秋、陳天璽氏を迎え、無国籍問題を扱った。

3.3 プロジェクト(最終発表)のテーマ

各学期の最終発表のテーマをあげておく。

2015年春

「日本の民族問題」(アイヌと沖縄)、「障がい者文化(視覚障害、聴覚障がい、学習障害、言語障がい)」 「異文化理解、多文化共生、地球市民育成のために」 「無国籍問題」 「国際結婚家族の問題」 「外国につながる子どもの教育の問題」 「外国人マイノリティの差別

の問題(「ハーフ」、人身売買、日本の中華学校、朝鮮学校の無償化問題)」

2015年秋

「中国の諸問題(北京の大気汚染、中国の障がい者文化、民族問題(モンゴル族)) 「ジェンダー、性的指向性」(日本とスウェーデンの女性活用、アニメとジェンダー、音楽マーケティングにおけるピンクマネーの重要性、LGBTと教育)」 「日本における外国籍児童の教育の問題点と解決策」 「沖縄の基地問題」 「難民問題(中国、欧州)」 「世界の言語教育と言語政策の問題」(タイの学校の言語教育、エストニアの言語問題、言語教育の目的とは何か、日本の英語化と生涯学習、カンボジアの外国語教育)」 「イスラム教について(ウズベキスタン社会とイスラム教、テロとイスラム教)」 「食生活(日本の給食、中国の食文化)」

2016年春

「世界の貧困の状況について」 「国際結婚家庭の教育問題について」 「外国につながる子供の教育問題」 「無国籍問題について」 「民族問題と差別—日本、中国、韓国の事例」

2016年秋

「日中交流の壁—中国の抗日ドラマ、日本のメディアの中日問題の取り上げ」

「[援助]のためのマイノリティー：積極的マイノリティと消極的マイノリティ」

「外国人に対するインクルーシブ教育

日本における多文化共生(学校における宗教の取り扱いについて)、世界の難民と教育、スウェーデンの移民・難民の教育、日本における外国人の教育機会」

2017年春

「障がい者について—聴覚障害について～手話とコミュニケーション、身体障害、知的障害、精神障害の社会支援」

「在日外国人児童生徒の学校教育の実態」

2017年秋

「LGBTと性教育について(日本の性教育、スウェーデンの性教育、タイのLGBT)」

「沖縄の基地問題から平和を考える」

2018年春

「外国につながる子どもの教育と支援」 「在日コリアン問題」 「健常者の障がい者とのかかわり方」 「日中韓のLGBTについて」 「宗教(イスラム教)について」 「難民問題」

プロジェクト(最終発表)の傾向としては、「在日外国人(コリアン、難民など)」 「民族問題」 「障がい者問題」 は授業でも取り上げているため、必ずテーマとなる。あと「外国につながる児童生徒の教育」 も人気のあるテーマである。授業でテーマにしなかったにもかかわらず「セクシュアルマイノリティ」 「LGBT」の問題は、2015年秋から自主的なテーマとして挙がっている。学生たちにとって、関心のあるテーマであることがわかる。また、

「沖縄基地問題」「イスラム教について」などもよくあがるテーマである。留学生の国での問題などが取り上げられるとより広がった興味深い発表になっていく。詳しいプロジェクトに関する分析は、次節で行うことにしたい。

4. 2018年春学期の振り返り

本節から、2018年春学期の授業を中心に、授業のすすめ方、学生のコメント、感想文などを見ながら、詳しい振り返りを行っている。

4.1 2018年春学期 多文化共修科目 A「異文化理解とコミュニケーション」の概要

まず、この「授業のねらいと目標」として、シラバスには次のようなことを書いている。

- ・日本人と留学生をはじめとするさまざまな文化的背景を持つ学生同士が、議論や協働学習を通して、異文化や多文化社会に関する理解を深める。
- ・多種多様な人々と対等にコミュニケーションをとることができる能力を高めることを目的とする。

授業スケジュールは、

1. 4/12 オリエンテーション—初回アンケート
2. 4/19 プロジェクト構想1
3. 4/26 在日外国人問題
4. 5/10 在日コリアン問題
5. 5/17 難民問題
6. 5/24 ゲストトーク：クルド人から見た中東情勢と難民問題（ワッカス、勝又郁子）
7. 5/31 ゲストトーク：トランスジェンダーの歴史と当事者運動（畑野とまと）
8. 6/7 ゲストトーク：ろう文化と手話（堀口）
9. 6/14. 「韓国・光州事件を知る」DVD鑑賞
10. 6/22 プロジェクト構想2
11. 6/28 プロジェクト発表準備
- 12-14 7/5,12,19 最終発表—授業評価アンケート
- 15 7/26 発表続き まとめ（ワールドカフェ）
途中で、当初の予定と変えたところもあった。

課外活動は、次の3つを企画した。

- 朝鮮大学校訪問（東京都小平市）5月23日（水）4限 5%
国際交流合宿（清里高原）5月26日（土）-27日（日）一泊二日 10%
群馬県館林市ロヒンギヤ難民集住地訪問6月24日（日）10%

課外活動も成績評価の10%に含め、奨励した。これ以外にも

学外の異文化理解に関するイベントへの参加（早稲田大学ヒューマンライブラリー）や映画鑑賞（「ラジオ・コパニ」「タクシー運転手」）なども課外活動の点数として含めた。今回は、ゲストトークや課外活動の企画で精いっぱい、当初予定していたミニ・ヒューマンライブラリーができなかった。来年度はやっていきたい。

受講者は、初回は、日本人学生19名、留学生9名が参加したが、最終的に日本人学生15名、留学生5名、計20名が定着した。日本人学生の内訳は、初等教育教員養成課程（A類）学校心理1、国際教育2、中等教育教員養成課程（B類）技術3、英語2、書道1、特別支援教育教員養成課程（C類）1、教育支援課程（E類）表現教育3、ソーシャルワーク1（4年生）とA類国際教育4年生（2015年度春に履修済みのため聴講）で、専攻のバラエティに富んでいる。4年生二人以外は、全て1年生であった。4年生の二人は、秋からインドネシア留学が決まっているとのことであった。留学生の内訳は、5名全て交換留学生で、中国1、韓国4であった。1,2回目に、スウェーデン、チェコ、ベトナムの学生も出ていたが、出なくなったのは残念である。特にアジア系以外の学生の参加が望まれる。留学生の人数と多様性の確保は今後の大きな課題である。

4.2 授業展開と内容

第1回 オリエンテーション

初回の授業は、オリエンテーションとして、授業概要を説明し、後半は自己紹介、他己紹介を行い、最後に初回の受講者アンケートを書いてもらった。アンケートによると、受講動機としては、異文化、多文化への興味というのが一番多く、留学生（日本人学生）と交流したい、留学に興味、コミュニケーション力をつけたいなどがあげられる。関心あるテーマは、トランスジェンダー、宗教、途上国支援、異文化理解教育、外国人児童生徒教育、難民、インドネシア、貧困問題、外国の教育文化、ろう文化と手話、セクシュアルマイノリティ、心の健康、中東情勢、ヒューマンライブラリー、沖縄問題、日本と世界の文化比較などである。だいたいの最初の関心と、最終発表のテーマが合致していた。

第2回 プロジェクト構想1

今期の授業から、最初の段階で、自分の関心のあるテーマを出し、グループづくりをすることにした。少なくとも最初に自分の関心のあるテーマと課題をまず明確にして、これからの授業に臨むことで、授業全体の目的意識も高まると思ったからだ。話し合いでは、グループごとに、テーマでの課題をブレインストーミングで出し合い、アクションプランを話し合った。話し合いの中で、テーマでどういうことを扱うのかはいろいろ出たが、アクションプランにまで行く班はあまりなかった。最初の段階でのアクションプランはきついようだ。結局当初のアクションプラン

の実行ということは前半ではできなかった。が、このグループが後半の最終発表のグループとなり、つながっていったようである。最初にこの活動をやった意味が分からないという意見もあった。前半プロジェクトの中間報告もなかったので、最初にグループづくりをしてもあまり意味がなかったようである。

第3回 在日外国人問題

クイズ形式で、在日外国人の数、国籍、在留資格、留学生の数、国籍など概要を知ってもらい、DVD「となりに生きる外国人」視聴して、「何を感じたか、何が問題か、何ができるか」について話し合ってもらった。

このDVDは授業で毎回見ているが、外国人労働者の実態、子供の教育、言語の問題など、在日外国人問題全般を知ることができるよいものである。多くの学生たちは問題の深刻さを知って、驚き、なにかしなければならぬという感想を述べている。ただ、感想の中に次のようなものがあったのが気になった。

「外国人労働者の話で日本ばかりが悪いと言われていたけど、それはおかしいと思った。人種差別どころよりも、自分の国じゃあるまいしもう少し考えたらどうだろうか。外国人労働者の賃金が安いことについて、学力との関係もあるなと思った。日本人が悪くないわけでもない。お互いが歩み寄り、理解することが大切。」

特に、賃金が安いことと学力が関係があるという指摘は、外国人だけでなく、低所得者や生活保護受給者に対する差別的意識としてあるのではないかと思われる。案外、多くの日本人の根底にもあるようなものと感じた。

第4回 在日コリアン問題について考える

この授業の最初に、猪飼野（大阪市生野区）の話をするのが常である。私が生れ、10歳まで育った町である。今年の3月にも生野区のコリアンタウンといわれているところに行き、写真も撮った。懐かしいとともに、やはり今自分がやっていることの原点もここにあるのだという実感がある。学生にそのことで始めるとすっと入っていくのだ。それから、なぜ在日朝鮮人があるのかという歴史の問題に入り、在日コリアンへの差別について話す。特に、彼らが北朝鮮との関係で様々な差別を受けていることに対し、「本国の権力者と地域社会の民衆を分けて考えるのが国際理解教育、多文化教育の原則だ」（田淵 2013）ということを強調する。在日コリアン問題の理解なしに、異文化理解や多文化共生など語るのはおこがましいことだと思うのである。

後半は、後ろのテーブルに3-4名ずつで座りディスカッションにした。事前に配っておいた『まんがクラスメイトは外国人』のユへの物語を読んで感想をいう。課外活動の朝鮮大学校訪問への質問を考える。そして、最近の情勢（南北首脳会談）なども踏まえ、日中韓朝が相互理解を深めるためにはどうすればいいかという討論テーマで話し合いを行った。

今回のクラスは、韓国人が4人いることで、学生たちに色々な気づきを与えたようである。まず、韓国人が在日コリアンの存在についてあまり知らないという事実日本人学生たちは驚いたようである。また、日本では北朝鮮のミサイル問題などが盛んに言われているが、韓国人はそれほど大きい問題として受け止めていないこと、また韓国学生たちが、北への憎しみよりかは南北の統一を望んでいることを知って驚いたようである。一方で、朝鮮大学校を北朝鮮の大学と思い、「北朝鮮の独裁国家を朝鮮大学校で強要されていることに対してどう思っているのか」という質問を出した学生もいた。いろいろ疑問はあるが、5月23日の朝鮮大学校訪問への動機づけとしての授業になったかと思う。

第5回 難民問題を知る

難民問題の概要を UNHCR のホームページから話し、まずシリア内戦とシリア難民の概要を話す。トルコ海岸に打ち寄せられたシリア難民の少年はクルド人であった。また、上映中の「ラジオ・コパニ」という映画を紹介し、シリアでISと戦っているのがクルド人であること、ここから、クルド民族の問題の話に入って行く。それから、日本における難民認定の現状（昨年は20人のみが認定）、そして日本に暮らす難民（クルド人）について話をする。今回初めて詳しく、ロヒンギャ難民の問題を取り上げ、6月24日の群馬県館林市のロヒンギャ難民集住地訪問についてよびかけた。討論テーマとして、自分の国の少数民族や移民難民問題、難民を受け入れるべきかなどの問題を話し合った。

難民問題については、まず知識として知らなかったという事実があり、また、日本にこれほどの難民申請者がいることも驚いたようである。ただ、受け入れに関しては、まず環境整備が必要であり、慎重にしなければという意見も多かった。「難民だけの国を作ったらどうか」という意見には、私もちょっと驚いた。本人は悪意を持って言っているのではないとは思いますが、やはりこれは、移民や難民を隔離すればいいというような考えにつながるのではないかと、少なくとも共生の考えではないと考える。

● 課外活動1 朝鮮大学校訪問 5/23(水)4限

朝鮮大学校訪問は、2015年春学期以降、毎学期継続して続けている課外活動である。2015年度の参加者で、朝鮮大学生とつながり、北朝鮮にまで行った学生もいた。今回は、日本人学生9名（うち授業外2名）、留学生3名の計12名が参加した。14時半に集合し大学のバスで出発、15時に朝鮮大学校正門に到着した。教務部の姜先生に出迎えていただき、キャンパスを案内していただいた。その後、いつもの教室で、朝鮮大学生6名が迎えてくれ、3つのグループを作って、自由な交流が行われた。予定の16時を過ぎて、帰る学生もいたが、残った学生で17時近くまでまたいろいろ話し合った。学生たちはそれぞれいい刺激を受け、考える機会になったようだ。以下、感想文の一部を紹介する。

はじめ朝鮮大学校に入って、金日成や金正日の肖像画、北朝鮮に感謝するような文字看板を目の当たりにして、日本にもこんな場所があったのかと驚いた。日本は北朝鮮に対して厳しい姿勢を保ちつつけている。日本と北朝鮮間での行き来をほぼ原則禁止されていて、北朝鮮に関する情報が少ないため、地理的に近い関係にあるが、私は今まで北朝鮮を身近に感じることはできなかった。しかし朝鮮大学校を訪問し、生徒と交流をしたことで、北朝鮮のことを少し身近に感じ私自身から北朝鮮に対して距離を置いていたのではないかと気づき、これからは北朝鮮と日本の関係についてもっと知らなければならぬと思った。

今回お話しした朝鮮大学校の方は、小学校からずっと朝鮮学校に通っている方であった。朝鮮学校では少人数指導が行われ、アットホームな雰囲気だそう。彼らは日本の学校だといじめられる可能性があるから、朝鮮学校に通い続けてよかったと語っていた。普段はあまり差別を感じたり日本での生活が不便に思ったりすることはないが、病院やレストランで本名を呼ばれることには抵抗があるそう。だが家庭環境が日本だけでなく朝鮮の文化もあるために朝鮮学校に通うことへの抵抗は持たなかったそう。文化間移動がある生徒は自分のアイデンティティで悩む生徒が多いと以前本で読んだことがあったが、私がお話しした朝鮮大学校の生徒は日本にいながら自分は朝鮮人だというアイデンティティをしっかりと持っていらした。そのアイデンティティを支えるのは自分のルーツをよく理解すること、朝鮮の歴史の知識や言葉に興味を持ち習得したことであると思った。歴史や朝鮮語を学んだのは朝鮮学校であるため、学校で施された教育が一人一人の人間性を大きく左右していることを実感した。朝鮮学校は北朝鮮の支援で運営されている。彼らは金一家を心から崇拝するという感じではなく、素晴らしい教育を受けさせてもらったことへの感謝、またその恩返しをしたいから金一家を認めているという感じであった。だが在日コリアンで北朝鮮からある程度距離があることから、北朝鮮が行っていることの善悪をしっかりと見極め、北朝鮮の考えと他国の考えを対等な立場から比べ、世界に発信し、世界の架け橋となるような立場として活躍したいとも語っていた。いま朝鮮半島では歴史的事実が起きている。(南北の融和ムード、米朝首脳会談など)そこで北朝鮮の立場として南北統合についてどう思っているか質問してみた。南北は統合すべきだといった。南北が統合すると北朝鮮に行ったときにある程度の自由が保障されるようになる、渡航がしやすくなるという理由もあるが一番は同じ朝鮮民族が分断していることに違和感を持っているからだということだった。修学旅行で軍事境界線を見たときは自分には朝鮮戦争に関係が浅いがとても悲しくなってしまうと言っていたことが私はとても印象に残った。一緒にグループで話していた韓国人の留学生も統一すべきだと言っていた。統一後は政治、教育、制度など様々な問題が発生するであろうが、二国が協力して0から歩み始めたいと言っていた。

私はこの時期に朝鮮大学校を訪問してよかったと思っている。これから朝鮮半島情勢がどうなっていくかは全くわからないが、隣の国でおこっていることを他人ごとと思わず、メディアの報道や考えを鵜呑みにせず、自分の確立した視点から見ていきたいと思う。そのためにこれから新聞や書籍で知識を増やし、また朝日大学生友好ネットワークを通してイ

ベントや勉強会に参加しているんな考えを持てるようになりたい。(日本人学生)

芸芸大学のバスを待っていた、その10分、校門の前でそわそわしていた私と経費おじさんの間に流れた雰囲気は JSA に劣らない緊張感だった。経費のおじさんに「私芸芸大学で来たんです」と言っていたその時、おなじみの言語での答えがここが朝鮮大学であることを実感するようになってくれた。建物のあちこちにかかっている宣伝立て札はここが本当に「そっち」の支援を受けることを肌で感じてくれたし、図書館にかかっている金父子の写真の下に北朝鮮の宣伝新聞と韓国の朝鮮日報が共にある姿は言葉で何とも言いえない感じの結晶であった。「やまいとこら。」という考えと同時にここが、ここに通う人々があまりにも気になった。

古い建物の空間に入ると、学生たちは少し特異なアクセントで「そんなに(선생님)」を呼んでいた。極めて昔式韓服と日本のローファー、ニーソックスが調和した制服は、彼らがどんな存在であるのかを代弁するように見えた。短い間だったが、たくさんの物語が行き来した。私は朝鮮学校と言うその名前のせいで、彼らの先祖の故郷は北の地方のほうだと勝手に思った。しかし、私と組み合わせさせてくれた学生たちの先祖は両方南の方の出身であったし、学生の中で一人は韓国の国籍だった。「国籍や地域を残して、教育によって理念や思想がこんなにも違うんだな。」と改めて切感する瞬間だった。私が用意していた質問はほとんど国籍と理念の乖離とか、どのように民族的自意識を持つことができたのかのように、極めて韓国で生まれ育った明らかな韓国人の質問だった。しかし、彼らが言うことを聞きながら、もはや彼らには韓国の国籍、出身地域は彼らのアイデンティティを表現することができないということを自然に感じた。ある意味で、私は彼らに聞きかかった答えを決めておいたかもしれないのだ。こんな質問しか考えていなかった私が本当にバカみたいと感じられた。

理念や何を目指しているのか、どんな思想の中で育ってきたかは、大分違ったけれど、他国で、3世であるにもかかわらず自分のアイデンティティと民族性を守りていこうと努力する姿を本当に尊敬するようになった。キリスト教を中心に行われる他国の同胞社会とは異なり、「제사」や「설, 추석」みたいな日を保存して、世代を超えて伝承するその姿に感動すら受けた。「また会おうね」別れる時のその約束を守る日がいつになるかはわからないが、彼らと私が夢見るその「 코리아 」でみんなが会うその日を期待している。(韓国学生)

第6回 ゲストトーク：クルド人から見た中東情勢と難民問題

トルコ出身のクルド人・ワッカス=チョーラクさん(日本クルド友好協会)とフリージャーナリストの勝又郁子さん(著書『クルド・国なき民族のいま』)を迎えて、初めてのクルド問題の講演を行った。外部にも呼びかけたところ、教員学生など9人の飛び込み参加があった。勝又さんからは、さすがに色々な写真を見せていただいて、クルド人がどういう民族かがより身近によく分かった。また、ワッカスさんからは、日本でのクルド難民の深刻な状況とその中でも生き抜くクルドの皆さんの姿がよくわ

かった。感想の一部を紹介する。

勝侯さんに見せていただいたスライドの写真がすごくリアルで生々しかった。「クルド人」の定義について、何となく宗教や思想が同じ民族なのかなど考えていたのだが、今日のお話を聞いて、更によくわからなくなった。共通なのは何なのか…が結局よくわからず、多宗教を容認しているということで、理想的な異文化共生社会のモデルになりうる民族の考え方であるように感じた。日本に住んでいると、宗教の違いで弾圧を受けたり虐殺にあたりることが理解できないし、イメージできない。完全に理解することは難しいと思うが、実際に話を聞いたり、勉強することで、少しずつでも近寄って行けるのかもしれないと思えた。日本政府が仮放免という資格しか与えていないこと（政治難民であることは世界的に知られていることなのに）がなぜなのかすごく疑問だった。難民、クルド、在日クルド人等について考えるきっかけになった。貴重なお話を聞くことができ本当によかったです。ありがとうございました。

クルド族が今難民の状態の理由は第一次世界大戦でイギリス、フランスなどという強大国によって中東の国境が決まります。それについて現在のフランス・イギリスなどの国は確かにクルド族を助けることが当然なものだと思います。…このクルディスタンの状況は、昔の韓国（朝鮮時代）に、日本によって国権が取られた記憶があるのでクルド人の気持ちを少しでも分かります。今の悲しい状況が起きたくないです。（韓国学生）

● 課外活動2 国際交流合宿（清里高原）

5/26~27 一泊二日で国際交流合宿が行われた。今回は学生 32 名（日本人学生 10 名、留学生 22 名）が参加した。多文化必修科目の課外活動にしたためもあったか、受講生が 10 名参加した。2 週間前にオリエンテーションをして、発表のグループ分けをしたので、合宿以前に皆が集まって企画を打ち合わせたり練習したりとそれだけでいい交流になったのではないかなと思う。1 日目の牧場体験や、2 日目のハイキングなどの野外活動もよかったが、宿舎での 1 日目のヒューマンライブラリーと 2 日目の午前中の班別発表会もそれぞれ皆が工夫していいものができたと思う。特に、2017 年度から開始したヒューマンライブラリーは、合宿参加者の 10 名程度が生きた本になり、それぞれの人生経験や自分の国での話などを語る会である。留学生の話には異文化体験が色々感じられるとともに、日本人学生の話にも深い話が見られ、それぞれが深い交流ができたのではないかなと思う。この合宿を通じ、異文化理解とコミュニケーションを深めることができたのではないかなと思われる。一部感想を紹介する。

先週山梨県の清里に合宿に行った。8 時に学校に集合してバスで 4 時間走って牧場に到着した。牧場は私の地域にもたくさんあるが体験として行ったのは久しぶりで懐かしい気分だった。行ってからバーベキューを食べたが思ったより肉が少なくて残念だった。バーベキューのやり方も韓国と違って焼くより炒めるようだった。でも共に牛乳も出て飲んで

みると凄く美味しくて気に入った。食べ終わって自由行動の後乳搾りを行った。牛は故郷でもたくさん見えるけど乳牛は少ない為搾りは初めてだった。なんか暖かくて珍しかった。乳搾りが終わって乗馬を行った。子供の時以後久しぶりだから本当に楽しかった。

牧場体験が終わって宿舎に行った。思ったよりいい建物だった。私部屋の体表になって鍵を貰って部屋を見ると本当に狭くて他の部屋と交換してもらった。その後体育館でバドミントンをやった。久しぶりのバドミントンで難しいけどやはり運動すると他の人と仲良くなるのは全世界同じようだ。その後男同志でお風呂に入ってからご飯を食べた。そんなに本番の和食はここに来て初めて食べた。知らない料理がたくさんあって全部美味しく食べた。この後交流会で知っている人もいたが他の人も仲良くなって楽しかった。そのから human library を行った。全般は立川での出会いを聞いた立川のアートツアーについて話を聞いた。聞いてみるとまた一度行きたいと思った。次の話はハワイの話だったが英語全然できなくて内容が知らなかった。そのせいで合宿の後英語勉強始めた human library の後 10 時も過ぎたからそろそろ寝ようかしたけどみんなで人狼ゲームをするようになって 12 じちょっと過ぎまでみんなで遊んだ。

次の日起きたら本当に寒くて 7 時くらいに目が覚めた。起きてみるとみんな布団を二枚ずつ持っていたがそれでも寒いと言った。起きてちょっと運動して朝ご飯を軽く食べてから check out して発表をやった。うちのテーマは韓国と日本の学校生活について話をした。高校時の写真を探すが大変だったが、久しぶりに高校の写真を見て懐かしかった。他の発表もみんな楽しい最後のダンスも楽しくてよかった。その後カレーを食べて土竜の滝を見にいた。自然なら私の故郷にも見えるから個人的には滝に期待はしなかったが、その水を見てなんかそちに入らないとと言う思いが頭をよぎって入ってしまった。ズボンも靴下も濡れてしまったが楽しかった。濡れたことも山登りが終わったら全部枯れてバスに乗る前には水に入った痕跡もなくなった。それからは学校に戻るだけ渋滞が激しくて家に帰るのが遅くなった。合宿に行くと新し友達もたくさん付き合ったし和服も着て楽しかったが一番楽しかったのはやはり私が知らない他のものを学んだことだと思う。（留学生）

今回の国際交流合宿は、異文化を学び、太極拳など様々な体験をし、多くの方と交流する機会となりました。多くの体験の中から、いくつかを振り返って感想を書きたいと思います。初日の交流会では、まだ話したことのない方と新たに関係を築けました。また、年齢や、母語、専門としていることなどがバラバラの人がたくさんいる中で話す機会はあまりないので、様々な話を聞けて楽しかったうえに、そのような環境で会話することは自分のコミュニケーション力を鍛えることにもつながったと思っています。ヒューマンライブラリーでは、まずエマさんのアメリカでの学校生活や、学校の制度・実態についてのお話をききました。エマさんの経験談や、ドラックなどの問題が身近にあることが印象的でした。また、英語での会話において、私の英語の拙さを痛感しました。より一層の英語学習の必要性を感じました。二部ではテイサンさんの作品についてのお話をききました。故郷敦煌の砂漠の形状からインスパイ

アされつくった作品等を見せていただいた。作品に関するエピソードを製作者本人からお聞きするというなかなかない体験ができました。ヒューマンライブラリーへの参加は今回が初めてで、参加前は緊張していましたが、参加してみると本の方と気軽に会話もできて楽しく、あっという間でした。翌日の太極拳の時間では、今まで学んだことのなかった、型や、気を静めるといった心構えを学び、新鮮でした。ただ単に型に合わせて身体を動かせばいい訳ではないところが難しいと感じました。先生の二本の剣を使用した舞は今までに見たことのないものでとても印象的でした。班別発表会では本当に様々な分野に触れていて勉強になりました。特に印象に残っているのが、韓国と日本の学校生活について比較したものです。時間割といった日常的なものから、修学旅行などの行事まで比較されていて、その違いに驚かされ、韓国の制度の厳格さを感じました。たとえば下校時間について、早くとも22:30までは学校にいるとききました。私のまわりでは遅い下校時間をよしとしない風潮があり、下校時の安全の確保を優先しているように感じられるため、その下校時間の設定は衝撃でした。そして、自分の班の発表では、皆で様々なダンスをして盛り上がるのができて嬉しかったです。メンバーで合宿前の準備・練習に励んでいたのも、本番であるように楽しい雰囲気でもダンスを紹介できたことに達成感を感じ、また、安心しました。この発表を通して様々な種類のダンスに触れ、そして改めてダンスを通して人と交流する楽しさを感じられたことを嬉しく思います。後のハイキングや、初日の牧場での乳しぼりや乗馬体験では、自然の景色に目を奪われたり、動物とのふれあいに胸を躍らせました。またこうした屋外での活動や就寝時には予想以上に寒さを感じ、高原にいることを実感しました。こうした活動はどれも貴重な経験となり、多くの人と交流したことが印象に残っています。また、やはり班でのダンスの発表が、準備期間を含めて達成感があり、学ぶことが多かったと感じます。今回この合宿に参加させていただいたことを嬉しく思います。

第7回 ゲストトーク：トランスジェンダーの歴史と当事者運動

講師：畑野とまと（ライター／トランスジェンダー活動家）

今期の授業で初めてセクシュアルマイノリティの方を招いてお話を聞かせていただいた。私自身の知識や認識がまだ不足なため授業で私自身が講義する自信もなかったのもあるが、今回このゲストトークは私にとっても非常に勉強になった。畑野さんの話は、2017年11月の明治大、2018年4月の川口でのヒューマンライブラリーでお聞きしていた。トランスジェンダーについてはその外見から当初はかなりの違和感があったが、実際にお話を聞いていると畑野さんのお話しはとて論理性と説得力があるもので、私自身のセクシュアルマイノリティに対する知識のなさを恥じたものである。ゲストトークでは、トランスジェンダーは「性同一性障害」という「障害」でも「病気」でもないことをしっかり確認した。また、アメリカでのトランスジェンダーの歴史とたたかひに共感した。民族や障がい者に対する差別迫害とセクシュアルマイノリティに対する迫害・差別は根を通じるものであると感じた。当日は、授業外の学生が3人、小金井

市市会議員の方も来られ、「学校で生徒・児童でセクシュアルマイノリティがいた場合の対応」など積極的な質問と討論がなされた。一部、感想を紹介する。

これまでLGBTについて知る機会があっても歴史を詳しく学ぶことはなかったの、今日知ることができてよかったです。特に心に残ったのは、フロイトさんのお話しと1970年のNYC GAY PRIDEのお話しです。発達障がいというものについてずっと考えていたので、とても心にささると同時に自分でもよくわからないもやもやが心に残りました。これからも考え続けます。脳の一部を切り取ったり電気で衝撃を与えたりしていたというのは本当に驚きました。高校生の時にLGBTに関するラジオドキュメントを製作して、地元のレインボープライド関係者の方や先生方にインタビューをしたことがあったのですが、その時に保健室の先生が「〜してあげる」という表現を使っていて苦しかったのを思いました。レインボープライドの方にお話を聞いたときに、「私女の子が好き」「男の子が好き」と血液型を言うくらいに気軽に言えるような社会になればとおっしゃっていたのですが、本当にそう思います。違うところを嫌がるのではなく、笑って話せるようになったらいいなと心から思います。

女性同性愛者に対し、治療と称して強制的に売春行為をさせていたというお話を聞いて、時代が違くと、同性愛者であるというだけでひどい対応をさせられているのだと知り、驚いたし、ショックでした。同性愛者の方は、男性なら男性だけに、女性なら女性だけに興奮を覚え、行為の対象は同性にしかないのだと思っていたけれど、興奮を覚えるベクトルの量が同性に多いだけで、異性にまったく向かないわけではないと知り、驚きました。

私は、同性愛者の方を病気だと思ったことはないけれど、大半の人が異性に好意を持つため、同性に好意を持つという点で、やはり自分とは少し違う、普通の人とは違うのかなと思っていました。しかし、今日の講話を聴いて、たまたま成長していくうえで好意の対象は同性に向いただけで、自分と同じ普通人間なんだと思い、講話を聞く前よりも少し近くに感じました。

今日の講話でトランスジェンダーの歴史を知り、昔よりトランスジェンダーに対する理解は十分深まってきていると感じました。今後、より理解を深めていき、差別を失くしていくべきだと思います。

周りのサポートがないトランスジェンダーの方の自殺経験率が57%にも昇ると知り、やはり周りのサポート、温かい対応が必要であり、自分が教員になった時にそのような生徒がいた場合、否定せず、またトランスジェンダーだからといって違う対応もせず、みんなと同じ態度で温かく接してあげられるようになりたいと思いました。

第8回 ゲストトーク：ろう文化と手話

講師：堀口昂誉さん（本学特別支援教育特別専攻科修了、現在、ろうあ児童福祉施設金町学園講師）

堀口さんは、2015年度から毎年ゲストトークとして来ていただいており、そのパフォーマンスぶりから、学生からは一番面白か

った授業に真っ先に挙げられている。私自身も「ろう文化宣言」を読んでろう文化に関心を持ち、手話を学んだ経験もある。「ろう文化」の自覚は、国籍、民族、人種などとはまた違って、身体的な違いからくる文化というものがあるということに気づかせてくれる。「ろう者」が障がい者なのかということを改め考えさせてくれるのである。授業外から、特別支援教育専攻の学生で堀口さんの施設でアルバイトをしている学生も参加してくれた。感想を一部紹介する。

今回のお話を聞くまで、ろう者とはただ単に耳の聞こえない人のことをいうのだと思っていました。もちろん、「障害者」と呼ばれる人だと思っていました。ろう文化宣言で発せられた「日本手話という日本語とは異なる言語を話す言語的少数者である」という定義には驚いたし、知れてよかったなと思います。堀口さんは声を出さずとも手話を豊かな表情で私たちに分かりやすく説明をしてくださっていました。…日本手話を使いこなす堀口さんはろう者であると思います。でも、もう少しろう文化宣言を読み込んでみて、ろう者とはどういう人々か、ろう文化とは何かについて考えてみたいなと思いました。手話も学んでろう者の方々と話してみたいなとも思いました。とても楽しかったです。

第9回 韓国・光州事件を知る、朝鮮半島情勢から平和について考える

今回の授業は、当初の予定では、前半振り返りということだったが、この前日に、NHK BS でアナザーストーリー「その時、市民は軍と闘った～韓国の夜明け、光州事件」が放映されていた。ちょうど光州事件を取り扱った韓国映画『タクシー運転手』が東京で上映されていたこともあり、急きよ、学生たちにもこの見せたいと思ひDVDに録画して、授業で上映した。6月12日 歴史的な米朝首脳会談もあり、朝鮮半島の問題がクローズアップされていたということもあり、お隣の国の現代で最も悲劇的な事件だったという光州事件を知ってほしいと思った。私自身が、2002年から2005年まで韓国・光州市で日本語教師をした経験もあり、1980年5/18光州事件は忘れられない出来事だった。視聴後、重い気分になり、討論する時間もなかったが、学生たちはそれぞれ色々な感想を書いてくれた。

私は今日の授業を通して、韓国の民主化が達成されるために多くの若者が犠牲になったことを初めて知りました。今まで、韓国の軍隊は北朝鮮の攻撃に備えるために存在していて、武力は朝鮮戦争が停戦状態になってから使われていないと思っていました。ですが、北朝鮮を警戒するあまり、軍が政権を握ってしまい、民主化を求めるデモが起っていたと知って衝撃を受けました。しかもそれが30年前までの韓国と知り驚きました。光州事件についても、そんなに恐ろしい出来事が隣の国で起きていたと知り、驚きました。市民を守るために存在している軍が、民主化を求める市民を殺すなんて考えられないことですし、なぜ殺されたのか分からない若者は本当に悔しかったと思います。そんな恐ろしいことが10日間も

続き、どんどん過激になっていったなんて信じられないなと思いました。もし私が光州の若者で、同世代の人が軍に殺されたらと聞いたら、絶対に家から出ないで、混乱が収まるのを待っていたと思うので、軍に対して立ち上がった若者は本当にすごいなと思いました。その7年後の学生運動でも、その時の思いが人々を動かしていったので、韓国の方々のパワーを感じました。この授業で教えてもらわなかったら、ずっと知らないままだったので、知ることができて本当によかったです。ありがとうございました。

アメリカと北朝鮮の階段が成就されてすごうれしかったです。韓半島の平和を望んでいたのも、やっとその道に近づいたなとも思いました。でも、やはり一つの国として認めてくれたら、そのまま永遠に二つの国に別れるのではないかと、統一に至るのではなく、終戦のままで終わってしまうのではないかと、という不安があるので個人的にはただただうれしい話ではありませんでした。光州事件は本当に起きてはならなかった事件でした。この事件で結局、みんなが被害者だとあらためて考えることができませんでした。軍部独裁政権による本当に残酷な歴史だと思います。彼らが守ってくれた民主主義を私も大切に、未来に伝えたいと思います。(韓国人学生)

第10回 プロジェクト構想2

最初に、Yahoo Japan ニュースで公開された、「祈りの果てに」という15分の動画を放映した。この週末訪問する、群馬県館林市の在日ロヒンギャ・アウンティン氏のドキュメンタリーだ。アウンティン氏は、26年前民主化運動をして弾圧のため亡命し日本に来た。今は、自営業の会社を立ち上げ、日本国籍も取得している。昨年8月のロヒンギャ難民に対する大迫害でバングラデッシュに70万人ものロヒンギャが難民として逃げたことに対し、早速現地を訪れ、自分の私財を投入して、学校を立ち上げたものである。アウンティン氏は子供たちに、「私たちはミャンマー人に復讐するために勉強するのではない。ミャンマーで平和に暮らすために勉強するんです」と言っていたのが印象に残っている。感想の一部を紹介する。

今日のロヒンギャのドキュメンタリー番組を見て、改めて「教育って大事だな」と思いました。教育=頭良くなることに注目されがちだけど、もっと基本的な倫理、道徳感を教えるのも教育の一つの形だと私も思います。

こんなふうに人身売買が毎日行われていることに非常に驚いた。彼らの社会を見ながら「人間らしさ」はほぼないのだと考えた。その中で学校を立ち上げるなど、子どもたちに希望を与えようとしているアウンティン氏の考えがとってもすばらしいと思った。また、難民の問題については、国々がおたがい責任を分けて対処すれば、より良い状況を作ることができると考えている。

後半は、最終発表に向け、グループを再度編成し、話し合いを

行った。結局最初に作ったグループと変わることはなかったが。

● 課外活動3 フィールドトリップ：ロヒンギャ難民と交流 (群馬県館林市訪問) 6月24日(日)

今回のフィールドトリップは、大学から予算を獲得し、中型バスを借り上げたが、結局、学生は6名(受講者は3名、ナイジェリアの教員研修生も参加)、外部から2名、引率を含め、9名の参加になった。10時半に正門前からバスで出発し、館林の公民館に13時頃到着した。会議室で、昼食としてロヒンギャの伝統的なチキンカレーをいただいた。ロヒンギャ難民現状報告では、在日ビルマロヒンギャ協会会長の長谷川健一氏が英語で行い、通訳を娘さんの長谷川留理華さんがおこなった。また、NPO法人千葉イスラーム文化センターや JAPAN PEACE CHARITY の方も在籍し、メディアの上毛新聞社と NHKWORLD JAPAN の方も取材に来ていた。詳しい内容は、報告書に譲るが、ロヒンギャ難民の歴史や難民の現状が語られ、「日本で一番力があるのは、学生と大学の人。日本の大学の人には、日本政府に働きかけ、ミャンマー政府に圧力をかけてほしい。」とアウンティン氏から熱い訴えがあった。15時半にモスクへ移動し、イスラーム教についてのお話を聞き、お祈りの様子を見学させていただいた。やはり、直接現場に行ってお話を聞き、モスクで体験することで、現状がよくわかり、大変な勉強になったと思う。大学人としても、このロヒンギャ難民の現状をより多くの人に知ってもらい、何か支援できることがあれば支援したいと思った。この訪問のことは、翌日「上毛新聞」で報道された。参加した学生の感想の一部を紹介する。

今回は、群馬県館林市でのロヒンギャ訪問フィールドワークに参加させていただき、多くのことを学ぶことが出来ました。中でも印象に残った部分を、2つ挙げます。

まず1点目は、ロヒンギャの方々が実際に生活している様子を見せていただいたことです。館林では、ロヒンギャの方々と昼食を一緒に食べたり、モスクでの礼拝の様子を見せていただいたりしました。ロヒンギャの方々が館林で生活しているその日常を垣間見ることが出来たのは、貴重な経験でした。特に、今までモスクの中には入ったことがなかったので、とても新鮮でした。モスクの意味やイスラーム教の考え方も丁寧に説明していただき、モスクはお祈りのためだけの施設ではなく、ロヒンギャの方々はじめムスリムの方々にとって、欠かせない存在だということがよく分かりました。

2点目は、ロヒンギャの方々の声を直接聞いて、ロヒンギャの方々が直面する現実や、問題の深刻さを学ぶことが出来たことです。実際にロヒンギャの方とお会いしてみて、アウン・ティンさんはじめロヒンギャの方々の思いの強さが、印象に残っています。報道や文章では決して感じる事の出来ない意志や感情まで、知ることが出来ました。

お話の中で、「学生には、一番力がある。学生に、頑張ってもらいたい。」という言葉がありました。この言葉を聞いて、グローバルな視野から、自分

を含めて一人ひとりに「学びをする者」としての責任ある行動が求められているように感じましたし、これからもそうした責任感を意識しながら生きていきたいと考えています。大学や大学院で学んだ知識や技術は立場の弱い人、困難に直面している人、そして社会のために利用してこそ意味があると改めて感じました。そのためにも、今回学んだことについて考え、伝えることを続けていきたいと考えています。

私は、「学ぶ」ことの中で、「自分の目を見て、自分で話を聞く」ということを大切にしています。報道や資料だけでは知り得ないことを知り、当事者の方の「思い」を感じることが出来るからです。今回のフィールドワークで、改めてその大切さを感じることもでき、非常に有意義な機会となりました。

第11回 最終発表準備

前半は、6月24日 ロヒンギャ難民集住地館林市訪問報告として、当日撮ったビデオ見せながら、解説した。参加した学生の感想も言ってもらった。後半は、グループ別発表準備のための話し合いの時間にし、中間報告を行ってもらった。

フィールドトリップに参加しなかった学生の感想の一部を紹介する。

<映像・写真を見て…>今まである程度知っているつもりでしたが、その迫害の悲惨さがこれほどだとは思わなかった。村を燃やす、うその情報を流す、暴力をふるうということがまかり通っていることに驚いた。現在の時代にもこのようなことがあるということを認識した。日本にもロヒンギャ迫害の元というか、歴史的に見ると、そのきっかけみたいな部分にかかわっているということ、日本は矛盾ともたらぬ支援の仕方をしていること、他人事ではないということが分かった。ミャンマーの政権がしていること、そしてミャンマー政権を支持し、お金を与えていることについて、日本政府はどのような認識か知りたかった。かつては、ロヒンギャも国民として認められていたという話があったが、でもその頃から、ロヒンギャは異質なものとしての意識があったのではないかと思う。「ロヒンギャが国民でなければ私も国民ではない」と言う発言がされたことなどから)<訪問に参加した学生の感想を聞いて…>日本でも、ロヒンギャの報道がされているが、それも日本の政府の管理下にあるということに留意しなくてはいけないと思った。

第12-14回 プロジェクト最終発表

最終発表に先立って、発表の評価基準表を配り、発表を聞いている学生は全員発表者の評価・コメントを書くことにしている。声の大きさ、身振り・手ぶり、アイコンタクト、資料の使い方などの形式面から、内容や質疑応答、チームワークなどもA,B,Cの3段階評価し、コメントも書き入れるようにした。これを、また全員にスキャンして渡すことによって、発表者へのフィードバックとし、発表者は最終レポートで、発表評価や質問、コメントも含んだ振り返りをするように指示した。

発表のグループとテーマは、下記のとおりである。
「外国につながる子どもの教育と支援」
「在日コリアン問題」朝鮮学校について、日韓関係
「日中韓のLGBT」
「障がい者への接し方」
「イスラム教について」
「難民問題」

それぞれ、PPTを工夫して作り、アンケート、インタビューやフィールドワークなどを行った調査結果などに踏まえ、工夫した発表をしてくれた。3回の発表期間だったが、最後の難民問題だけ、最終回にずれ込んでしまった。発表のまとめと振り返り、授業全体の振り返りを最終レポートで書いてもらった。

第15回 ワールドカフェ テーマ:多文化社会の課題解決に向けて

最後の授業は、「難民問題」の発表と、後半は「多文化社会の課題の解決に向けて」というテーマでワールドカフェ形式で討論会を行い、授業全体のまとめにすることにした。時間が少なくなつたため、3セッションの時間は15分ずつに短縮した。(本来は20~30分とする。)まず、ワールドカフェのやり方を説明し、第1セッションのテーマは、「異文化理解とは何か?」で、文化とは、異文化とは、理解とは?この授業の核心のテーマについて話し合ってもらった。第2セッションは、「多文化社会の課題とは何か」で、これまで授業であげたどのような課題があるかについて話してもらった。第3セッションで、「多文化社会の課題解決に向けて必要なことは何か」について話し合ってもらった。最後の全体まとめで、各班の話した内容を発表してもらった。そして、各自今日の話し合いのキーワードを一言ずつポストイットに書いてもらい、前のホワイトボードに貼り付けて共有した。ワールドカフェの形式は初めてだったが、活発な討論が行われたようである。

キーワードとしては、次のようなものがあげられた。

「敬意」「尊重・配慮」「教育も関わる」「再認識」「現代ならではの」「知ること」「他を知り自分を知る」「納得はしなくてもよい」「自分の文化も守る・大切にすること」「存在を認める」「先入観を除く」「視点の転換」「個人を理解する」「ゆとり」「知識」「1対1」「当たり前が違う」「多文化社会の中の自己」「自覚すること」「境界線」「行動を起こす」

このキーワードの意味も含めて、最終レポートの授業の振り返りの中で、この最後の授業の「異文化理解」ということについて学生たちが書いた意見を紹介しておきたい。(傍線は筆者)

・異文化理解について学びたいと思って参加した授業であったが、回数を

重ねるごとに自分の中の異文化理解の定義が揺らいでいった。最後の授業で、異文化理解について意見交換をした際に、異文化理解は自分以外について知ることという意見を出すことが出来た。これまでは異文化理解は海外の文化を知ることのみ考えていたが、授業を通して、自分と違うという面ではセクシュアルマイノリティーや障害を持っている人も当てはまるかもしれない、異なる考え方を持っているという点で隣にいる友人も当てはまるかもしれないと気が付いた。そして、自分が教員になった際に、どのような異文化理解教育をしたいかについても考えることが出来た。単に子どもたちが海外の文化に触れるだけでなく、自分と異なるものに対して考察し、どのように接するのかを自分で考えることが出来るような、そんな異文化理解教育がしたいと思った。答えが子どもたちの数だけあるような、子どもたちの視野が広がる教育がしたい。授業を通して、異文化理解教育について自分なりの答えを出すことが出来、履修して良かったと感じている。

・最後の講義では、ワールド・カフェで異文化とはという話題から始まり多文化社会の課題、課題の解決に向けて必要なものといった流れで話し合いました。異文化を100%受け入れることはできないものであるが、まず知ること、理解することが大事だといった話し合いになりました。2ラウンド目には違う班に行ってまた違った話を聞いてその中で、異文化を理解することは自分を見つめなおすことができるのではないかななどの意見を聞けました。また、異文化を外国と自国の範囲内で考えるだけでなく、日本の中でも異文化はあるなどと考えを深めることができました。

・授業全体で私が学んだことは「異文化理解をする際のある一つの文化の構成員であることを自覚することの大切さ」である。そもそも異文化というのは国や文化、食などに限ることではない。「自分が持っていないもの」ものの総称だと考える。外国人にだけではなく、障がい者、私たち日本人の中でも各個人、別々の「異文化」の中で生きているのである。「異文化の中で生きる者」という考えを持つことの必要性を感じた。…本当に大事なものは「人それぞれ少しずつ異なる文化の中で生きている」ということを認識して尊重するということが大事なのかなと思う。したがって、異文化交流をするときは自分の文化の考えにとらわれず、その人どんな文化で生きてきてどんな価値観を持っているのか個別に知っていかなければいけないと思う。加えて、相手から見れば「私たちは異文化の人々」なのである。そのことに自覚し、理解せずとも、お互いの考え方を尊重し関わっていくことが異文化理解に必要不可欠な態度だと思う。

・多文化というものは他国の文化とイコール関係ではないということです。この授業を受講する前は多文化と聞いて、外国のことしかイメージできませんでした。しかし、ろう文化をはじめとする障害者文化、LGBT文化、それだけではなく日本国内での地域の違いもある種の文化なのだと気づくことができました。中でも特に私はろう文化のすばらしさに気づきました。手話も言語の一部だという考え方があることを初めて知り、だから、聾者の第一言語は手話で、第二言語は日本語ということなんだと

理解することができました。

・私がこの授業で初めて学んだことは、「多文化」、「異文化理解」という言葉の可能性である。今までは、これらの言葉を聞いたとき、連想されるのは、「外国人」、「外国の文化」、「在日外国人」などという言葉だった。もちろんこれらの言葉も「多文化」や「異文化理解」という言葉の定義の中に含まれるものだが、この授業を通して、「障がい者」や「性の多様性」、「LGBT」という問題も「多文化」として考えていくことができることが分かった。…特に印象的なのは、最後の授業で「異文化理解」について話し合ったとき、韓国からの留学生が、「結局どこまで理解したら異文化を理解したといっているかわからない。」と話していたことだ。…彼女の言葉でより考えさせられた私は、「異文化理解」についてさらに考えてみた。確かに一つの文化について理解を深めたとしても、それはその地域だけ、またはその人物だけのものであるかもしれない。一つの文化について学んだことは、決してその文化のすべてを理解したことではないのである。だから私は、文化や障がい、性の種類などジャンルごとに理解しようとするのではなく、実際に目の前にした人間一人一人を理解することが大切であると考える。障がいを持つ人々について調べた時のまともでも同じようなことを述べたが、「個人をきちんと理解する」こと、これがこの授業全体を通して学んだことのすべてだと私は考える。世界中に多様な価値観や思想を持った、様々な経験をしてきた人々がたくさんいる。私は、そんな世界に触れて、彼ら一人一人とじっくりと向き合っ、目の前の人をじっくりと時間をかけて理解する、決して偏見を持たない、そんな人間になりたい。また教育現場においても、一人一人の子供たちと同じ視線になって接していき、そしていつかは異文化理解に興味を持つ子供たちを育てていける教師になりたい、と今回の授業全体を通して強く思った。

・私は今までずっと「異文化」という言葉が好きではなかった。ひとりひとり違っているのが当たり前なのに、どうしてわざわざ「異なっている」と言うのだろう、「異」とつけることで壁を作っているのではないかと、思っていた。しかし、ワールドカフェで他の人と異文化とは何かという話をする中で、違うと理解しているからこそ気づけることもあるんじゃない？と言われて、確かにそうかもしれないと思うようになった。まだはっきりとした自分の中の答えを見つけることはできていないが、これからの人生で考えて続けていきたいと思う。

・最後の討論で、「異文化理解とは自分を中心として周りを異質なものとした上でそれに触れていくイメージで、「多文化理解だと自分を含めた多くの文化を理解していくイメージ、という考えに出会った。私は、この授業を通して様々な認識が変化していったのだが、それは「異文化を理解する段階だったのだと気づいた。自分の文化の視点から、自と他の文化の間に何か違いを見つけたり、それに触れるという段階だ。しかし、多文化社会にはその段階だけではきっと足りない。異なる文化を学び、そして自分はこの多様な文化の中の一部だと自分を客観視することが重要なのだと思う。これは、性的マイノリティを学んだ際、グラデーションの中の自分という認識を持ったが、それとリンクす

る気もする。自分の文化の内から観るだけでなく、俯瞰的・客観的に観ることが大切だと感じた。そして、文化の理解は同化することとは異なり、全部飲み込もうとする必要はないが、その差異を受け入れたいとしたことを理由に他の文化を排除してはならない、文化が存在するのには許可もいらぬし否定もされない、と感じた。

・この一学期の間に、多文化共修科目の授業を受講しながら、「多文化」に対する認識を新たに持つようになった。これまでは単に他の国と国との出会いだけが文化だと思ったけど、性少数者と性少数者ではない人が一緒に生きていく社会も一つの多文化社会と認識するようになった。今までの授業で性的少数者は以外に障害者、難民、在日コリアンなど様々な種類の多文化をテーマに取り上げてきた。その中で本人が確実に感じたのは、多文化社会を生きていく上、最も必要な1つの姿勢は、相手を自分と同じ「人」として認識して接する姿勢と思った。私達はすべて同じ人だ。性的指向や国籍や身体の不自由はただ個人特性のいずれの一つに過ぎない。誰かの目が茶色や青色だったり、誰かの性格が活発したり、あるいは消極的だったり—このように、誰かの国籍がどこで、誰の性的指向がどうだとかは、どこまで個人の特徴の一つであるだけであって、その人全体を判断する指標となることはできない。韓国人だとして全部同じでなく、日本人として全部同じでない。このように性的少数者だ、難民だという一つの特徴で一人の人間を決めつけることはできない。誰もが同じように人であり幸福の権利を有し、また、人だから当然傷つくのもできる。「誰もが同じように人である」という一つの前提からすれば性的少数者が一緒に生きていく社会はもちろん、他の種類の少数者あるいは他の種類の多文化においても望ましい社会を作ることができると思う。

・人と人の「異文化

前論じたのはある意味で、全部国と国間の異なる文化や、あるいは同じ国の中で、異なる地方による文化の違いだ。しかし、同じ国でも、同じ地方でも、また同じ学校に通っている友達同士でも、文化の「異」は存在しているはずだと思う。それを思い知らされたのは堀口さんなのだ。

6月7日の授業で、ろう文化と手話をテーマにするゲストトークが行われた。そのゲストはまさしくメガネをかけているタンバツの堀口さんだった。講座が始まる前に、以前の講座と違って、ホワイトボードがわきに置いておいたのだ。少し気になって授業を始めると、堀口さんは両手のひらを胸の前で合わせて、何かを言おうとしていた。あの時、一瞬で自分が聴力を失うかのように思ったのだが、すぐにこの人はろう者かもしれないということがわかったのだ。

授業の中で、おもしろいクイズをやったり、読唇術のゲームに挑戦したり、スライドを見たりするという形で授業を行っていったのだけれども、むしろ、ホワイトボードとマークがなければ、お互いに何も通じられないはずだった。

実は、授業の中で、私はずっと考えていた途中で、私は留学生だけれども、ほかの日本人の学生は堀口さんと同じ国の出身で、同じところに住んでいる学生もいるかもしれない。それなのに、ホワイトボードやマークのような道具がないと、意思疎通が何にもできないはず、それも「異文化」ののではないかとひしひしと感じた。同じ国籍を持っている、同じ文化に属している人

だとしても、周りの人の間にまた「異文化」が生じてくる可能性があるのだ。そのため、ろう「文化」というのだろう。…人と人の「異」文化も存在している。それを思い知らされつつ、堀口さんが幼い頃から私たちが想像がつかないほど、どんなに苦労してきたのだろうと、また、たとえ自分が周りの人と「異」文化があるとしても、誰にもコミュニケーションができるように頑張っているその姿を思うたびに、心が温もってくる。誰しもこの世界にやさしく扱われるように祈っている。

・私がこの授業を聞いて一番先に変わったのは「多文化」という用語の意味だった。国籍が違うものが多文化だと思っていたのか、この授業を聞くうちに、友達の多文化とは何か?と問う質問に、私は知らずにこの授業の目次を詠った記憶がある。授業を聞きながら真の多文化の意味を体得することができた。また、授業を受講の中で特に、どのような印象になったテーマの一つを選ぶより、少数者全体に対して多くの考えることができた。全体的に授業で、現在の社会の少数者に関して学びながら自分なりに考えて見たことについて話したい。…少数者との共存を実現するためには、少数者だけの努力で残してはならない。ただ私のことではないという安心と同時に終わる、憐憫に止まっては、社会は変わらない。少数者の力では無理があることに多数者の努力と変化が必要なことだ。多数者が少数者に向けてできる努力はたいしたものではない。まず、彼らを正しく見つめることである。彼らの言葉を多数者の事故でこして聞かないで何の濾過もなくそのまま聞くことができる準備をすることだ。また、少数者を多数者より劣った個体、あるいは面倒を見なければならぬ個体などで片付けてはならない。つまり、少数者を多数者の寛容の対象にしてはならないということだ。また、多数者の行動が必要だ。私じゃなければ構わないという安逸あるいは利己的でさえした考えから脱して困っている少数者に向けて助けを与えかねない行動をしなければならぬ。それが共存できる直接的な方法であり、唯一の方法だろう。同時に少数者たちは無条件的に斜めになることが正しいものではないことを自覚しなければならない。彼らも多数が取っている価値を認め、それに対して、自分たちの意見や考えを勧めなければならぬ。片方が他方を把握するという一方向的な寛容でなく、お互いを認めて配慮する態度が可能する際、正しい共存が可能だろうと今回の学期授業を通じて考えられるようになった。

・どんなところにも文化はたくさんある、そう考えていくうちに視野が広がったように感じます。多文化の領域は考え方ひとつで大きく変わります。受講前の私は「異文化・多文化」と聞くと海外の人たちの多様な文化とばかり思っていました。でも、受講後、何が「異文化・多文化」か、と考えたとき、必ずしも人種や国籍の違いだけではなく、さまざまな価値観や生活、考え方の多様性のことだ、と思いました。「文化」とは?と考えるとそれは個性の現れで人それぞれに習慣や日常があってその一つ一つが文化なのではないかと思いました。そう考えると意外と身近に「異文化・多文化」が存在するということになります。だからたくさんの方がいるのは当然で、自分と違う人がいるのも当然。トランスジェンダーとか障がい者という呼ばれ方があるもののそれ以外の人にそういった名前がなくて「異文化・多文化」にふれており、その存在が普通なのだと

思います。そういったことを今回の授業で考えました。

・最後のワールドカフェで扱った【異文化理解とは何か】について述べたい。始めからこの問題を取り組むには大きすぎたので、私がいたテーブルではまず【異文化とは何か】から入ることにした。「所属している人や国が違うことか?」「食べ物とか生活の違いも異文化の代表的な例だね」「考えとか価値観とかの違いもそうじゃない?」「授業でろう者とか在日外国人のこともやったよね」などなど様々な意見が出た。そしてそれらを要約すると【自分が持っていないもの、こと】のことを異文化と呼ぶのではないかという結論になった。日本とアメリカはもちろん異文化であるし、ヨーロッパとアジアでは植民地支配した側とされた側で大きく文化が異なる。日本の中で言えば東日本の人からすれば西日本は異文化である。また、他人だって何かしら異文化を持っているはずだ。もっと深く考えれば自分の中の自覚できていない領域、無意識も異文化と呼べるのかもしれない。

次に【理解とは何か】。これは考えれば考えるほど分からなくなり結局結論は出なかった。まず理解=知ることだという意見が出た。しかしはたして知るだけでいいのかという疑問が生じた。また、理解とは相手を知ることだけでなく自分自身を見つめ直すことではないかという意見を何人かが述べた。今回特定の文化の領域を調べたことによって自分の文化の領域がどのくらいあるのかと疑問に思ったそうだ。これは哲学的でおもしろい意見である。…

最後に【異文化理解とは何か】。最終的にまとまったのは、異文化理解とは違うということ認識すること。自分の視野を広げ、多角的に考えられるようになるため異文化理解は大切だということだった。何か違えば文化も違う。人それぞれ異文化を持ち合わせている。異文化を知ることによって世界はぐんと広がる。実際のこの授業を通していろいろな異文化に触れたことは私の知識の幅を広げた。そして異文化理解とともに自分の文化のことをよく知るべきだ。日本の文化はとてとても特徴的である。あなたの文化の特徴を教えてくださいと言われたときにしっかり答えることができたほうがいいだろう。

4.3 授業評価と全体振り返り

最終日までに出してもらった授業評価アンケートをもとに全体の振り返りを行う。(20名中18名回答)

I. 留学生(日本人学生)と共に学んでよかった点、改善すべき点

良かった点

(日本人学生)

様々な国の視点や価値観を共有できた点/ 同じテーマに対する考え方が個人のバックグラウンドで異なっていたのが興味深かった。出身国が同じでも各個人それぞれは違う意見を持つという当たり前のことに気づけた。/ その国の人のそれぞれの見方、考え方が知れたことが一番良かったこと。/ 同じテーマについて、留学生や他学科の学生、他学年の学生の様々な意見を聞くこ

とができ、多角的に視ることができた。また、視野が広がった。特に国によって意見が異なることをテーマに勉強できたのが良かった。／留学生ともっと議論したり、意見交換したりして、お互いのこと、国について、政治について話し合うことができたらよかった。／日韓の問題など他国の学生と話さないとわからないことなど、自分の考え方が広がったり、深い思考力を得ることにつながった。／留学生の出身地での、ある問題に対する主流な考え方を知ることが出来た点。そういった考え方や捉え方を比較できた点／日本人の視点だけでなく、韓国、中国の視点からも国際的な問題について考えを持てた点。／留学生は日本の学生にはあまりいないような性格を持っていて勉強になった。(発言力然り、考え方等)／日本人とは違った観点での意見の交流ができた。／それぞれの国によって状況や考えが違うことを知ることが出来ました。／留学生の出身地のことや考え方の違いなどを知れたこと。言葉が伝わりにくい時などに伝えるためにどうするかなど考えることが多かったこと。／後ろの机で何人かで話し合うときに、それぞれの国での生活など、様々な話が出てとても楽しかった点。／特に韓国について、日本と反対側から見た意見を聞いたこと。／いろんなことを知れた。

(留学生)

日韓関係の問題に対して実際日本人学生の意見を聞くことができてよかったです／課外活動が多かった。／多文化について、本当の意味の多文化を学ぶことができた。

改善すべき点

(日本人学生)

話し合いの機会が少なかった点 / もっと相手の国のことも勉強して話せばよかった。／日本語が得意でない学生もいるので、もっとゆっくりと時間をかけて話す機会があるとよかった。／諸問題について話すときに、自分の知識がなさ過ぎて深い部分まで話すことができなかった点。／受講者全体に対する留学生の割合がもう少し増えるといいと思った。／もっと多くの留学生や様々な国からの留学生がいると、より深い学びが出来たと思います／いきなりグループになってもはじめなかなか会話しづらいので、もう少し何かやってからのほうが会話が弾んだかもしれないと思った。／グループワーク時にうまくコミュニケーションが取れなかったこと。

(留学生) 交流の機会が少し少なかったと思います。アイスブレイキングとかの活動があったら以後の 討論などがもっと活発に行われると思います！／時間を超えるときがある。／日本人と外国人のかかわりがちょっと不足だった。

II. 「異文化理解」と「コミュニケーション」が深められたか。

1. 異文化理解が深められたか。

はい17 いいえ わからない1

コメント:意見交換の際に理解を深められたと思う。／異文化

＝多国籍でないことを強く感じた。／異文化理解として様々な問題を勉強できた／異文化や、今まであまり知らなかった異文化について知ることができたが、それらについて深められたかはわからない。／今までの学生生活では習ってこなかった知識を得られた。／例えば手話など様々な文化に触れ、それらについて学ぶことができました。／異文化と聞いて、私は日本と外国の違いを超えた理解という考えしか当初なかったが障害者文化やゲイ文化など国籍ではない異文化もあると気づきました。また、日中韓間の今の問題について本音で話すことができて、両者の食い違いや、誤解していたことが分かり、表面的でない理解ができたと思います。／理解までいかにくとも考えることが出来た。／授業を始めた当初と比べて格段に「異文化理解」ができたと思う。／世界で起きていることや、マイノリティーの方々について学び、自分なりに意見を持つことが出来ました。／自分がこれまで知らなかったトランスジェンダーの方や、難民の方や異文化について知れてよかった。／「違っている」ことを楽しめるようになったと思います。

2. コミュニケーションが深められたか。

はい15 いいえ わからない3

コメント:深められたと思うが機会が少なかった。／様々な考え方などを話したり会話できた。／もう少し活発なコミュニケーションの場があったらよかったかと思う。／様々な学生、留学生と話すことができたし、イベントにも参加して自分の経験値を上げられた。／授業や課題活動にて、言語や音楽などを通して様々な交流ができました。／グループワークをするときに、相手の言っていることを十分理解し、その発言に対して自分が新たに考えを持ち相手に伝えるということの練習ができたと思います。／時折、班活動があったため良かった。／もう少しコミュニケーションをとる時間が欲しかった。／意見の交換や、フィールドワーク、最終発表の準備等を通して多くの生徒とコミュニケーションを取ることが出来ました／徐々に話し合いになったし、自国の文化などの話もできて楽しかった。／この授業を取っていなかったらこんなにたくさんの人と楽しく話せなかったと思います。留学生と話せたのはもちろんですが、日本人学生とも仲良くなれたのはとてもよかったと思います。

III. 授業の各トピックについて、評価(5. 非常によかった。4. よかった。3. 普通。2. あまりよくなかった。1. よくなかった。)とコメント

1. 在日外国人問題—DVD となりに生きる外国人視聴
5. ⑧、4. ⑧、3. ②、2. 1.

コメント:身近な考えるべき素材であり、他人ごとではないのだと実感した。／知らないことを知れた。／題名通り、本当に身近に外国人がいることが分かったし、今までよりも現実的に感じられた。／普段あまり身近に外国人の存在を意識したことがな

かったので、日本で生きる外国人の生活を知ることができてよかった。／知識不足だったので、映像の視聴はたいへん参考になりました。／入学前に外国人労働者について調べたり、新聞をチェックしていたが、実際に声を聴いたり、現実を写真以外で見たことはなかったので、良かったです。／この授業で扱うテーマの大枠のイメージが出来た。／日本に暮らす外国人の概要がしっかりつかめた授業でした。／DVDを通して、何が問題なのかを理解することが出来ました。／日本に難民としてきている方々の苦労や不安など全く知らないことが多かったのでよかった。／とても身近なことなのだと思います。在日外国人問題はこれまでに学んだことがなかったため、学べてよかった。

2. 在日コリアン問題

5. ⑧、4. ④、3. ⑤、2. 1.

コメント：あまり触れることのなかった話題だったので新鮮で、知らなかった現状ばかりだった。／朝鮮学校訪問などで、かなり詳しく勉強できた。／在日コリアンという言葉や経緯などは知っていたが、詳しい話や、多く住んでいる地域の話などを聞くことができて勉強になった。先生の実体験のような話からも、まだ根強く差別意識も残っているということが分かった。／在日コリアンの人々の苦悩や日本人との歴史の変遷を詳しく学べてよかった。／在日コリアンの民族的アイデンティティなどの話が興味深かったです。／在日コリアンが問題になっていることは知りませんでした。／一つの問題を知り、考えることが出来てよかった。／私の理解力が無かったのも十分にありますが、もう少しわかりやすく説明してほしいかったです。／韓国出身の留学生から意見を聞いて面白かったです。／特に関心を持っていたテーマで、在日韓国人が日本人なのか韓国人なのか、どちらでもないのかなど在日韓国人の苦労や双方の理解が難しいなど知れてよかった。／朝鮮学校がどのようにしてできたかなど知らなかったことがたくさんあったため知れてよかった。韓国からの留学生のお話も聞いて良かった。

3. 難民問題を考える

5. ⑦、4. ⑦、3. ③、2. 1.

コメント：日本にも身近に難民問題が迫っているとは思わなかった。／難しかった。／難民問題ということは聞くけれども、どこか遠くの話かと思っているところがあり、その実際について知り、考えることができた。／難民の存在、難民に対する日本の支援など事実だけでなく、その人たちの思いまで知ることができてよかった。／日本の難民受け入れのハードルの高さを感じました。背景が複雑で難しいですが、知らなければならぬと思いました。／難民問題には距離を感じていたけれど、岡先生が川口市にクルド人難民が集住されていることを知り、難民問題に対して少しは身近に感じるきっかけになりました。／難民についてなんとなくしか理解できていなかったもので、よい体験となっ

た。／大まかにはつかめたがあまりにも漠然としていた／地図を見せて頂いて分かりやすかったです。知らなかったことがたくさん分かって良かったです。／多くの難民、難民を受け入れている国などを知ったうえで、日本にもできることはあると感じた。／日本は難民を受け入れていないとずっと思っていたため、受け入れていると聞いたときはとても驚いた。／歴史から学ぶことができて良かった。

4. ゲストトーク：クルド人から見た中東情勢と難民問題

5. ⑩、4. ⑥、3. ②、2. 1.

コメント：クルド人の視点から情勢を見たのでまた違った問題が見えた。／なかなか難民の方から直接お話を聞く機会はないので、貴重だった。／難しい問題だと思った／生のクルド人の話を聞くという、私にとっては貴重な時間だった。報道でもクルド人の視点では語られないように思うので、クルド人がどのように考え、何を思っているのかを知る良い機会だった。／難民について学んだあとに、クルド人についてより深く学べてよかった。／クルド人に関して高校で知って、少し関心を持っていたので詳細を聞いて良かったです。／クルド人難民の存在は知っていたが、どうして難民になってしまったのかや実態について初めて、しかも当事者から教わることができ、自分にとって貴重な話を聞けたと思いました。／前週のテーマに引き続き、理解を深められた。／講義はものすごくよかったです。前提知識が足りなくてついていけない時があった、反省しています。／少し難しかったですが、中東における宗教などについても知ることが出来たので良かったです。／クルド人の方の苦労や、会社での扱われ方など何とかしたいと思った。世界史や政治経済などで名前だけは聞いたことがあったがどのようなものかは全然知らなかったため知れてよかった。

5. ゲストトーク：トランスジェンダーの歴史と当事者運動

5. ⑧、4. ⑤、3. ④、2. 1.

コメント：トランスジェンダーについてまだまだ知らないことだらけだと思った。／くわしい歴史を知ることが出来たが、もっと当事者の方ならではの話も聞きたかった。／トランスジェンダーの方が生徒だったらという考えを持てた。／実際に当事者に会うのも初めてで、初めて知ることが多かった。／実際のトランスジェンダーの方に話を聞いたことで、身近に感じたり、説得力が増して、新しくたくさんを知ることができた。／テーマに選んだこともあり、ゲストトークがたいへん参考になりました。教員を目指している身として重要なことを多く学んだと思います。／本当のトランスジェンダーの方が来られるとは思っていませんでした。最初は大びっくりしました。教師にはLGBT生徒に対応できる力がないといけないということが当事者から聞いたことでよくわかりました。／ゲストスピーカーがわかりやすい説明だった。しかし、このことに関しても事前に自分で

調べておけば良かったと思う。／歴史について知ること、今の社会の問題点について考えることが出来ました。／知らなかったことばかりで、お話を聞いて本当に良かったと思いました。ジンジャーマンのような図がとても印象に残っています。

6. ゲストトーク：ろう文化と手話

5. ⑩、4. 3. 2. 1.

コメント：講師の方のお話も手話の練習もとても面白かった。／ゲストの方が素晴らしい授業をしてくださりよく理解出来たと思う。／本で勉強することもいいけれど、当事者の話を聞いたことが良かった。特に、日常生活でどのような問題点があるのかを具体例を挙げて話していただいたので、わかりやすかった。／トランスジェンダーの授業と同じように実際のろう者の方に話を聞くことができ、また、本当は話ができるというサプライズもあり、ろう者の方と実際に接する等貴重な経験をすることができた。／聞こえないが故に手話を使っている人、ではなく、手話を第一言語としている人という捉え方に切り替わったことが印象的です。／前半の無声の講義がすごく新鮮で面白かったです。また手話の体験も初めてだったので初めてのことがたくさん体験できました。／なかなか忘れられない経験が出来た。知識のインプットだけでなく、当事者と話すことの重要性を実感した。／事前に資料を読んでいたこともあり、全体的にかなりいい授業だった。／とても分かりやすく楽しいゲストトークでした。／手話という文化というのが印象に残っていて健聴者や難聴者ということではなく、文化という考え方を知れた。耳が聞こえない人の苦勞や、健聴者の理解などすごく大事だと思った。／障がいとは何なのか、改めて考えるきっかけになりました。一生忘れないと思います。／感動的なスピーチでした。誰しもこの世界にやさしく扱われますように願っています。

7. 韓国光州事件を知る：VTR 視聴

5. ⑬、4. ④、3. 2. 1.

コメント：あんなに軍が国民を攻撃しているのは驚いたし、意味も分からず攻撃するのは国の意図がわからず見ていて混乱した。／自分が何も知らなかったことをすごく恥ずかしく思った。知っておくべき現実だと思う。／今まで知らなかったことを知れた。／今まで全く知らなかったので、知ることができたということが収穫だった。遠くない昔にこのような事件がすぐ近くの国で起こっていたということに衝撃を受けた。／名前だけ知っていた光州事件について、多くの衝撃的な映像を含めて、一気に知識を増やすことができた。現在の韓国の情勢からは想像つかないような歴史的な事件があったことを詳しく知れてよかった。／VTRはたいへん衝撃的でした。でも、ほんの少し前に、想像を超える凄惨な事件があったのだと実感したことは自分にとって大事な学習だと思います。／光州事件は世界史で用語として覚えていて、正直大した事件でないと考えていたが、ビデオを見て

戦争同然の現場だったことに驚いたし、勉強になりました。／光州事件と聞いてもピンと来なかったが、一つの歴史を知ることが出来た。／悲劇的なイメージはかなり伝わった。もっといろいろな背景を知りたいと思った。／隣の国で起きたことでも全然知らないことだったので、とても衝撃を受けました。／人間の恐怖心というのは怖いと感じた、多くの死者が出たこの事件を知れてまだはつきりしないことも多いようだけどこれから明らかになるといいなと思った。／この VTR を観るまで光州事件を知りませんでした。たくさんの方が亡くなったことや、頭に弾が当たって亡くなってしまった人のお母さんのお話など、本当に衝撃的でした。知ることができてよかったです。／自分も知らなかった 5/18 について考えられる時間でした。

8. ロヒンギャ難民集住地訪問報告会

5. ⑥、4. ⑥、3. ②、2. ①、1.

コメント：ロヒンギャ難民集住地について知ること、難民について考えを深めることができた。／訪問はできなかったが、よく理解できた。／実際の映像や写真を見ることができたことが良かった。訪問した学生とロヒンギャの人たちの中で交わされた会話などがあるともう少し全体像などがつかめたかもしれないと思う。／映像がとても面白そうだったのに、あまり時間がなくじっくりと話を理解することができなかった。／部活の関係で訪問できなかったのが、参考になりました。／ビデオやお話を共有できたことが、在日ロヒンギャ難民の願いを実現する一歩になったと思い、良かったと思います。／現地の人たちの主張を説明されていけばよりよかったです。／自分の意見を振り返ることが出来たので良かったです。／ロヒンギャ難民も、この授業がきっかけで知りました。イスラム教についても知らないことがたくさんあったので、知ることができてよかったです。ハラルフードをいつか食べてみたいと思いました。

IV. 授業の方法について、よかった点、改善した方がよい点。

よかった点：普段はなかなか触れない話題に触れることができる点／多文化共生というテーマで様々なトピックを扱ってくださったので、視野が広がりました。／ほんとうに多文化のことを多く学ぶことができこれからの人生において大事なことが学べたと感じる。ゲストトークなどで当事者からの話を聞けることはかなり有意義だと感じる。／たくさんの方の異文化について知ることができたこと。ゲストトークを通して、当事者の実際の話を生で聞いたことはリアリティがあって、また、以前よりも身近なこととしてとらえることができた。／様々な参考資料や映像があって、あまり知識のない問題に対しても、導入がスムーズだった。／話し合いの形式が多く情報の共有・意見交換などが盛んにできる点。映像資料・ゲストトークなど様々な学習を通じて自分の考えを深めていける点／先生の講義で終わるのではなく、生徒同士のディスカッションや授業中に生徒の考えの発

表の機会があったこと。資料がたくさんあったこと。／ろう文化など、インプットしたものを実際に体験できる機会があったのがよかった。／いろいろな世界問題に触れられてよかった。／分かりやすいスライドと、映像などの資料があり理解しやすかったです。／留学生に発表の機会が多くあっていろんな考え方を知れてよかった。コミュニケーションが多くあってよかった。／多様な国家出身の人たちと意見交換できたこと／後ろの机で何人かで話し合うときに、ひとつの机に留学生が必ずひとりはいるようにして下さった点。／たくさん話し合い、交流があった点。／色々な人の体験が聞けるし、その人の立場に立って考えるようになることができました。

改善した方がよい点：話し合いなどの活動が少なかった点／前半のグループ活動(各個人の興味関心に合わせた)の意味がよく分かりませんでした。自分の学び(コメントペーパーなど)を公表したくない場合の配慮等はあるといいと思いました。／授業内での異文化交流がもっとできるとよかったです。／せっかく留学生と話せる機会なので、問題についての説明や理解の時間をもう少し少なくして、話す時間を増やしたほうがいいと思った。／コメントペーパーや評価表を公表してもかまわないのですが、できれば名前を隠してほしかったです。／予告されていた中間報告がなく、最終報告のみであった。／今までの資料の参考として、春学期最後にでも参考文献一覧にしてくれるのもっと良いと思う。夏休みに読めると思うからです。／最後の意見交流の時間が少なかった点、よく授業が延長していた点です。／最初の時点で僕もそうだったのですが、知らないことが多い中で一度グループ分けをしてもあまり話し合いに参加できなかった。／指示が的確でないときが時々あった点。

V. 課外活動(国際交流合宿、朝鮮大学校訪問、ロヒンギヤ難民集住地訪問など)について、よかった点、改善した方がよい点。
よかった点：多様な言語が飛び交っていたのでとても新鮮で面白かった。／授業の一環としてこういう機会があるのはとてもいいと思います。日程の都合で参加できず、残念でした。／なかなかできないことができること／(朝鮮大学校)学内を見学したり、朝鮮大学校の学生さんのお話を聞いたり、質問したり、実際に経験することができたこと。／課外活動の数が多く、何かしら一つでも参加できるようになっていたところ。／ヒューマンライブラリーを体験できた点。主体的に異文化交流を図る機会があった点。／遊ぶだけでなく、ヒューマンライブラリーや発表があったことで他の合宿とは違った有意義な時間を過ごすことができました。(合宿)ただ話を聞くのではなく、交流する機会があったこと。(朝鮮大学校、ロヒンギヤ訪問)／格安で貴重な経験ができたので本当に良かった。／直接ロヒンギヤ難民の方から話を聞く機会を持ってすごく興味深かったです。／ごはんがとてもおいしかった点。宿泊施設についてから、体育館で卓球

やフラフープなどのスポーツを通して交流できた点。全体の交流会でも同じ班の人と楽しく話せた点。自分は話しかけることがあまり得意ではないため、合宿に参加していなかったらこんなに留学生と交流できなかったと思います。参加してよかったです。(国際交流合宿)／朝鮮大学校で実際に朝鮮人の方と深く討論できたのはとても良い経験になりました。／いろいろいくことができた。／清里合宿に行ってきました。国際交流ができたし、友達もできました。そのようなチャンスをもっとほしいです。

改善した方がよい点：帰りのバスも選択できるとよかったのではないと思う。／大勢で参加して共有したほうがそれぞれの学びも深まると思ったので、授業をとっていない人に対する宣伝をもっとすると参加人数増加が狙えると思った。／合宿の持ち物などの詳細が遅めだった点／同じ人とずっと班が同じ事が多かったのも、ほかの人と十分に話す時間がなかったこと(合宿)／しいて言えば、翌日の予定があるので、早く帰れるようにしたほうがいいと思います。／ロヒンギヤ難民集住地で、スカーフが必要ということをもう少し早く教えて頂けると嬉しかったです。／夜寒かった点。部屋の壁が薄かったため、夜隣の部屋で騒いでいたのがうるさくてあまり眠れなかった点。(国際交流合宿)／行けない日にちがあったので、できれば複数日欲しかったです。／事前情報が少ない。

VI. プロジェクトと最終発表について、よかった点、改善した方がよい点。

よかった点：準備期間が長かったのでフィールドワークなど発表準備が充実できた。／各グループごとに示唆に富んだ内容とプレゼンで面白かったです。／ほかの研究の人の意見が聞ける／それぞれが興味のあることについて、問題意識をもって探求することができたこと。／グループのメンバー一人一人がそれぞれに課外活動に参加したり、調べ学習を行って深い理解にたどり着けたところ。／発表をきいて様々なテーマについてより学習できた点。他の人のプレゼンを見て発表の仕方などを学べた点。自分の考えや学習したことをまとめられた点／全体の授業の冒頭でプロジェクトを決めたので、自分のプロジェクトに関することに関してアンテナを高く持つことができ、いろんな情報を収集することができたこと。／理解が深められた。／事前にきちんと調べられた。／テーマが様々で面白かったです。／グループでの発表の形で個々に分担して調べられてよかった。／前半と同じ班員で最後まで活動できた点。発表がきっかけでこれまでよりも知識を身につけられたりお話を聞きに行ったりできた点。／深く調べる機会が取れてよかった。／みんな相当工夫して資料を集めたりするのがすごく感心です。

改善した方がよい点：発表時間を時間で区切る／タイマー等を

活用するなどして時間の制限をもっと強めてもいいと思います。／発表時間を厳格化すること。／なかなか時間が合わず、3人それぞれのプレゼンになりすぎてしまった点。／チームを組んでも発表や評価などは個人の面が多かったところにやりづらい面がありました。完全にチームならもっと細かく役割分担などができ、完全に個人ならパワーポイントのレイアウトや進行などをよりカスタマイズできると思いました。個人発表にしてテーマ順に発表するか、完全にチームの発表にして評価シートも全体的な観点を増やすかの方がやりやすいかと思いました。／最初は具体的に何をしたらいいのかよくわからなかったのもう少し詳しくプロジェクトについて説明してほしいかったです。／一回が長い。／もう少しリハーサルを行ってほしいかったです。／前半プロジェクトがよく分からないまま終わってしまった点です。／発表時間を変えたらいいとおもった。／評価するときに匿名評価ではなかったのが正直に評価するのが難しかったです。／前半と後半で発表の班を変える必要はないと思います。前半と後半でグループを変えるという説明ではなく、変わりたい人がもしあれば変わることも可能であるという説明のほうが混乱なくいいのかなと思いました。そのほうが、最終発表に向けた準備をはやくから始められると思います。／時間を守らない。／時間ももっとコントロール出来たらと思います。

VII. この授業を受けて、自分の考えに変化があったか。また、今後どのように生かしたいか。

1. 授業を受ける前と受けた後で考えに変化があったか。どのようなことを学んだか。

難民やトランスジェンダーなど国際的な問題について今まで触れることがなかったので今回の授業で様々な問題の現状について知ることができ、視野が広がった。／先述しましたが、異文化＝多国籍ではないということ。また、留学生と同じ授業を受けたことで、国ごとのステレオタイプをもってしまっていたことに気づきました。／これからの人生では、絶対に大事であると思った。教師になる身としてはなおさらそうだと思うので、これからはしっかり勉強したい。／授業を受ける前は、その人の肩書というか、カテゴリーにばかり目がいっていたけれども、授業を受けて、カテゴリーの中にいたとしても、一人一人考え方は違って、実際に大事なことはその人たちの一人一人はどう思い、考えているのかということだと知った。／多文化社会、異文化理解などという言葉から連想するのは、在日外国人、他国と日本の関係性、外国人児童の問題など、国を超えた問題ばかりだと思い込んでいたが、LGBT や障がいについてなど、多岐にわたるテーマについて、留学生との交流もしながら学んだことで、“多文化” “異文化” という言葉についての考え方がより広がった。／変化はありました。まず単純に知識が増えたということです。難民問題や光州事件などは特に知識が足りなかったのもういったことの知識を習得して、現在の課題を知ったことは大きいで

す。また、それらは他人事ではないという意識が強まりました。そして、今までの考え方が変わりました。たとえば、「手話を第一言語とする人」という概念を得たり、性はカテゴリー分けされるのではなく誰もがグラデーションの中の一部であると考えられるようになりました。／今まで本やニュースや新聞などのメディアをそのまま正しい事件や一般的な考えとして受け入れていたが、そうしてはいけないということ学びました。実際に当事者にあつて話を聞くことの大切さを学びました。／日本人も含め、多様性を実感できた。／授業を受ける前は世界の深刻な問題、日本に住む外国人の問題に関してほとんど知識が無く、そういう人々に対してあまり意識を向けることが無かった。しかし、この授業を通してこれからも様々な問題に目を向け自分なりの見解をはっきりさせて行動したいと思った。／授業を受ける前は、異文化理解は違う文化を持っている外国について知ることだと思っていたが、日本にいても、違う文化を持っている人がいることに気が付き、異文化理解は一言で語れるものではないなと分かりました。社会的にマイノリティーとされている人について知ること、自分の在り方を見つめ直すことが出来ました。／トランスジェンダーやゲイの方障害を持った方など、認識や理解が自分の中で薄かったのでこの講義でたくさんさんのゲストトークや映画など見ることで理解が持てるようになったこと。日本でも多くの人に理解を広げていくことが大事だなと思った。／多文化の「意味」がより広がりました。／ワールドカフェのときに先生もおっしゃっていましたが、「異文化」について考えるとき、以前は食べ物など表面的なことしか思いつけなかったけれど、今は他の面からも考えられるようになったと思います。また、授業を受けていく中で、障がいとは何なのか、異文化とは何なのかはわからなくなっていったのは、これまで考えられなかったことが考えられるようになったという点ではいいことかなと思います。／ありました。朝鮮半島について興味を持てた。難民について何もわからなかったところから抜け出せた。

2. これからの学生生活や将来の生活にどのように生かしたいと思うか。

これから多くの国の人に出会うと思うので今回の授業で学んだことを生かして多様な人がいることを忘れず過ごしていきたい。／自分も相手にとっては異文化であることを心にとめて交流しようと思うようになりました。理解することはできなくても受容することが多文化共生の第一歩につながると思います。／教師になるにあたって自分の生徒が自分とは異文化であることはあると思うので、しっかり考えたい。／特に子どもと関わっていく中で、例えば、「その子はこのような障害だから」とある種のステレオタイプのような考えをもってカテゴライズしていき、形式的な接し方、指導、支援をするより、他の子どもと同じように、その子にも個性があり、その子を一個人として尊重していくという意識を持ち、またそのよう姿勢を身に着きたい。／教

育的な視点からだけでなく日々の生活に根付いた様々な問題があると感じたので、それを支えていける立場としてあるべき姿を追求していきたい。／私は教員を目指しているので、将来学校で、例えば外国人児童、障害児、性的マイノリティについて学んだことを生かしたいと思います。それは、それに該当する児童への対応はもちろんですが、その家族との協力、教職員との情報共有、その児童の同級生への教育といった形でも生かしたいと思っています。この授業を通して、この授業で学んだテーマは、自分が学習したということだけでは完結せず、学んだ者がこのテーマを広げ、多くの人が認識し考えることが重要だと思うようになったので、そのように情報提供・教育といった形でも生かしていきたいと思っています。／異文化に関すること、マイノリティに関することのニュースがあったら、他人事に思わず、身近なものとして調べていきたいです。また可能であれば当事者の声を聴きに（講演会など）行って、世の中に流されることなく自分の考えを確立していきたいです。／多様性を理解したうえで、自分の特徴を出していきたい。／今考えているのは、夏休みに授業で扱った内容に関する参考文献を読むことです。授業内で扱った視点以外にも目を向けているような視点で問題を捉えなおしたいです。／私は、英語教員になって、生徒の異文化理解の助けをしようと思って大学に入学しましたが、異文化理解はそんな単純なものではないと気付いたので、英語科ではどんな形で異文化理解を行えるのか考えたいです。また、難民について多くの人に伝えたいです。／いろいろな人の理解をもって接することができるようになりたいと思ったし、多くの人に理解を広げたいと思った。／自分の周りにいる多文化を認識して、より大勢の人を包括できる考え方をもちたいです。／最終発表の内容と被ってしまいますが、その人をしっかり見るようにしたいです。本やインターネットで知識を集めても、自分が関わっている人のすべてがその通りではないということを常に頭に置いて、ひとりひとりと向き合えるような人間でありたいです。その人を見る、ひとりひとりと向き合うということも含めてこの授業では本当にたくさんのことを学べたので、学んだことやこれまでよりは身につけることができたコミュニケーション能力を活かして、人と深く関われるようになったり自分の夢を叶えたりできたらと思います。／人数のばらつき。／外国人の方ともしっかりコミュニケーションをとっていききたいと思いました。

VII. 全体として、この授業について、よかった点、改善した方がよい点、感想などがあれば何でも書いてください。

よかった点：合宿など企画やフィールドワークがあった点／多文化共生に対する様々な観点を教えていただけました。これをもとにさらに自分の学びにつなげていきたいです。ありがとうございました。／普通では経験できないことができるのは本当にありがたいと思った。映像や資料、イベントの情報などが豊富で、自分の学びたいことに対して行動に移しやすかったと

ころ。／ゲストスピーカーさんからのお話や、映像、新聞、実際に自分で体験するなど様々な方法で学習する点がよかったと思います。高3の時にこういった難民などのテーマに関して知識が足りない自分に気づき、もうすぐ成人するのに恥ずかしいなと感じていました。でも、自分でなかなか勉強ができなかったので、今回この授業を通してこういったテーマに触れられたのを嬉しく思います。／当事者に直接話を聞くことや資料映像などを大事にされていたことです。そのことで問題に対してより身近に感じ、本やインターネットなどのメディアでは知れないことを知ることができました。私は国際事情や多文化を学びつつ、教育についても学びたいと思い国際教育選修に入ったのですが、今学期で「国際」「多文化」に関することが学べる授業がなかったので、とても有意義な時間を過ごすことができました。興味深い話が多く、面白かったです。春学期、ありがとうございました。これから岡先生の授業を受ける機会はほとんどないかもしれませんが、今までの課外活動が楽しく、ほかの人があまり聞けない話がきけたこと、体験ができたことに大きな充実感を覚えたので、また機会があれば声をかけていただけると嬉しいです。／必修科目を普通に履修しては体験できないことを体験できた。／いろいろな問題を毎回取り上げていて良かったと思う。／とても楽しく内容の濃い授業でした。フィールドワークも貴重な体験になりました。／留学生という自分とは違った文化で生きてきた人と接する機会というのは、自分の大学生活でなかなかできなかったと思うので、留学生とのコミュニケーションの機会が多くあってよかった。また、トランスジェンダー、盲目の方などいろいろな人について知れたことは、自分の中で大きな成長になった。／今まで認識することができなかった難民問題、在日朝鮮人問題などに対して詳しく学習する機会を持つことができてとても面白かったです。自分のまわりにはないのだとして世界にその問題が存在しないと考えると、多文化社会の一員としてその問題たちにより真剣に接近してみたいです。／たくさんの方と話せた点。自分の中で変化があった点。この授業を受けていたから知れたこと、できたこと、変わったこと、話せたことがたくさんあります。どれも他ではできない経験でした。ありがとうございました。／たくさん留学生や外国人の方と少しナイーブな話が出来たのはとても貴重な体験でとても良かったです。

改善した方がよい点：課外活動があるのはいいことだと思うが、それを評価に入れるのはよくないと思った。日程的に難しいということが生じやすいし、全員に機会が均等に与えられた中での評価ではないと思う。／プレゼン準備の時間が授業内でもあると、もう少し深いところまで調べたり、追究できたと思う。／プロジェクトに関して、最後にパワーポイントで発表するのは何となくわかっていたのですが、中間報告では何を事前に用意したらいいのか、中間報告は全体に向かってするのか、それともグループ内で各自調べたことの確認をするのかなど、よくわ

かっていなくて、1～2週間前にグループ内での戸惑いがありました。／ゲストトークの授業前に、参考資料をいくつか提示してほしいです。／もっと会話が弾むような工夫が欲しいです／合宿の感想が名前と一緒に公開されることは知っていたけれど、講演会の感想も名前付きで公開されるとは思っていませんでした。名前付きで公開されると知っていたら、家族のことは書きませんでした。発表の評価表が名前付きで公開されることも知りませんでした。名前付きで本人に届くと知っていたら書かないことも出てくると思うので、公開するときは名前を消したほうがいいのではないかと思います。

以上の、アンケート結果を踏まえ、授業担当者としての全体の振り返りをしておきたい。

まず、留学生と日本人学生の共修という特徴については、受講者全てが、肯定的にとらえており、それぞれの国の文化や考え方のちがいに気づき、話し合えた点でよかったという意見が多かった。ただ、授業内での交流の時間が思いのほか少なかったので少し不満を持っている人もいたので、授業内での留学生と日本人学生との交流の時間をもっと増やしていきたいと思う。

授業タイトルである「異文化理解とコミュニケーション」について深められたか、という点については、ほとんどが深められたという意見でだったが、コミュニケーションの時間が少なかったという意見もあった。これからは各トピックごとに十分な討論の時間を入れていきたい。

授業のトピックについては、今学期初めて行った、クルド人、トランスジェンダーのゲストトーク、光州事件のビデオ上映、ロヒンギャ難民に関する動画、報告会などそれぞれ盛りだくさんの企画で、理解が追いつかなかった学生もいたがそれぞれ初めて知ることに驚き、考える契機になったのではないかと思います。授業の中で、一番わかりやすく感動的だったというのは、いつも「ろう文化と手話」の堀口さんの講義だ。これからも引き続きお願いしていきたいと思う。

授業の方法については、ゲストトークや映像、様々な資料があり、意見交換もたくさんできたのでよかったという意見が多かった。また、コメントペーパーや感想文、発表の評価表の名前は隠してほしいという意見も数名あったので、これからは、公表する場合は、名前はマスキングテープで隠して出すようにしたい。

課外活動は参加した学生は非常によかったという意見だったが、課外活動を評価に含めるのかという点に関しては異論もあった。できるだけ、課外活動に参加して体験を深めてほしいという趣旨で評価にも含めているのだが、日曜日や水4限などで参加できない学生もいる場合、他の異文化理解のイベントに参加する、こちらが指定した映画やDVDなどを視聴するというのを課題にして対応している。今回は3つの課外活動以外で、早稲田大学のヒューマンライブラリーに参加したのが一人だけだった。

最終発表については、自分の関心のあるテーマで、やれたことや、様々なテーマを勉強できたなど肯定的な意見がほとんどだったが、やり方として、チームと個人の発表の兼ね合いがうまくできなかったグループもあったようだ。また、発表時間を大幅に超えたため、予定より時間がずれ込むということがあり、時間管理をきちんとするという課題が大きく挙げられる。

授業前と比較して、異文化に対する理解が変わったという感想がほとんどである。色々なトピックについて、新しく学びや気づきがあり、それをこれからの教員としての仕事や人生の中で生かしていきたいという意見が多かった。

全体として、この授業をとってよかった。色々な意味での学びがあり自分が変わったという感想をほとんどの学生が持ってくれたので、授業担当者としてもやりがいがあったと思う。

最後に異文化理解の変容に大きな影響を与えたヒューマンライブラリーと多文化共修科目との関わりについて、2016年以降の活動を振り返り、今後の課題を打ち出していきたい。

5. ヒューマンライブラリーと多文化共修科目

ヒューマンライブラリーに初めて参加したのは、2014年11月の明治大学ヒューマンライブラリー(HL)だったと思うが、2015年度の多文化共修科目の立ち上げに向け、自分自身が色々な異文化、多文化に触れ、勉強する、また、授業でのゲストスピーカーとして来てもらう人の発掘ということもあった。やはり最初は、在日外国人関係の「本」を中心に選んだ。在日コリアンや難民、ろう者などの本を選んだ。その他、ミニ講演として、セクシュアルマイノリティの方やさまざまな障害を持つ方のお話を聞いたりした。異文化や多様性を自分自身も学び、授業にも生かしていくために、駒澤大学、川口のHL、獨協大学のイベントなど色々な所に足を運んで自ら体験しながら勉強した。

2015年度の多文化共修科目の中では、在日外国人関係以外は、ゲストトークとして、ろう者と視覚障がい者のお話しと体験の授業を持った。2015年度の秋学期には、学生の中でLGBTや性教育の発表をするものが出て、学生の関心の高さをうかがわせた。また、2015年度の多文化共修科目に関する発表を2016年6月に異文化間教育学会でした時に、障がいの問題は、聴覚障がい、視覚障がいだけではないという指摘もあり、様々な障がいや難病、その他の問題にも取り組んでいかなければならないと感じた。ちょうど、その学会の大会の中でヒューマンライブラリーを全国で取り組んでいる方々の発表が多くあったので参考にさせていただいた。学会から帰って、学芸カフェテリアの学生サポーター募集の説明会などでも交流があった「障がい学生支援室」「男女共同参画支援室」「学生キャリア支援室(学芸カフェテリア)」の教職員にも話を持ち掛け、ヒューマンライブラリー実行委員会を立ち上げることになった。教職員中心の実行委員会の中で、基本コンセプト、企画概要、テーマづくりを行っていき、教育系の大学でやるヒューマンライブラリーとして、「未来の子

供に伝えたいこと」というテーマにし、教育支援に関わる人も「本」として入れていこうということになり、具体的な「本」探し、交渉へと進んでいった。在日外国人関係は岡が、障がい、難病関係は「障がい学生支援室」が、セクシュアルマイノリティ関係は「男女共同参画支援室」が、キャリア支援、教育支援関係は「学芸カフェテリア」の教職員が「本」を探し、またそれぞれの学生サポーターにもスタッフを呼びかけた。

10月の開講を待って、スタッフ募集説明会を開き、その中からスタッフの学生が数名でできた。また、秋学期の「多文化共修科目 B 多文化社会とコミュニケーション」においても、3人の学生がスタッフになってくれた。この過程で、読み合わせ（打ち合わせ）として、学生と一緒に、日本クルド文化協会の事務所や、地域の外国人学習支援教室に行ったり、イスラム教の留学生に会いに行ったりして、ヒューマンライブラリーで「本」と「読者」の橋渡しをする「司書」として学生スタッフと一緒に活動した。12月4日の第1回ヒューマンライブラリーは、「本」12冊、スタッフ15名、読者20名のこじんまりとしたものであったが、濃密な対話の場になった。「本」は、イスラム教徒の留学生、クルド人、外国につながる子どもたちの支援者、LGBT、性分化疾患、発達障がい、ADHD、難病患者、留学支援者、教育支援者など12冊。ヒューマンライブラリーにスタッフとして参加してくれた多文化共修科目受講者の感想の一部を紹介する。

はじめに、ヒューマンライブラリーにスタッフとしてかかわる機会を与えていただいたことに感謝申し上げます。ヒューマンライブラリーというものを知ったのは今回が初めてだった。以前より、様々な方のお話を聞き自分の世界を広げられるような活動は好んでおり、積極的に行っていったため、すぐに参加を決めた。一方的な講演会でも、意見を求められるディスカッションでもない、対話というかたちはとても心地の良いものであった。

読者としては長谷川勇紀さんのお話をお聞きした。長谷川さんはNPO法人カタリバの職員として子供や若者の生き抜く力引き出し、応援しているという。カタリバでは、ナナメの関係、つまり、親や先生、友達とも違う「憧れの先輩」という関係を大切にしているようだ。この話は、私が神奈川県藤沢市の方で行っている「My Ow Place～成長に愛を～」の方針と重なる部分が多く、共感と安心感を覚えた。若者だからできること、それを包み込むように、大人だからできることがあるのだということ、長谷川さんの家族への愛情と共に知ることができた。

また、当日からではあったが、神永涼さんの担当をさせていただいた。神永さんは発達障害を抱えており、個人的にとっても興味のある分野であったため、担当としてお話ができた、スピーカーとしてではない控室での一面が見ることができたりと、貴重な経験ができたことに感謝している。発達障害でありながら発達障害を抱える若者を支援しているというのは一見すると特殊なことであるが、神永さんがおっしゃる「発達障害がアイデンティティなのではなく、いろいろある個性の中の一つに発達障害という名前がついているだけ」ということをもとに考えてみれば、何ら

おかしいことではない。関心を持ち考えてきたつもりではあったが、やはり、障害者、健常者と分けて考える意識がまだ残っていることに気づかされた。発達障害というのは、簡単に言ってしまうと極端にあることだけを苦手とする障害だ。しかしこれは、得意不得意の延長線上にあり、障害というよりは、個性といったほうが適切なのだ。ただ、その個性が日常生活において困難が出てくるほど大きい場合、発達障害という診断名をつけているに過ぎない。だからこそ、彼らの前にある障害を取り除くことは賢明な判断とは言えない。我々がすべきなのは、石をよけるのではなく、その石にどうやったら向き合うこと、あわよくば乗り越えることができるのかを考えること。それこそが本当の意味での自立に向けた支援なのだ。そしてなにより必要なのは周りからのサポートよりも当事者の意志である。「失敗しても大丈夫だからちよつと頑張ってみよう」そんなふうに見える環境が、いま、我々が作っていかねばならない共生の社会というものなのではないだろうか。

ヒューマンライブラリーでは、30分間の対話の中で本の体験や価値観を直接聞くことができます。本と参加者の間に入るものは何もありません。参加者は聴衆ではなく読者なのです。気になった事は何度も質問する、説明してもらおう。まるで、本を読み返すかのようです。

岡先生から紹介があるまで、私はヒューマンライブラリーというイベントの存在や、世界中で開催されているという事を知りませんでした。東京学芸大学で開催した今回のヒューマンライブラリーのアンケートや、友人たちの反応からも日本でのヒューマンライブラリーの知名度の低さがうかがえます。大学での実施だったにも関わらず、大学生・大学院生の参加者が少なかった一因はそこにもあると思います。次回開催時にはこの反省をいかし、広報活動にも力をいれてより多くの方にヒューマンライブラリーに足を運んでもらえるようにしたいと思います。

SNSで簡単につながる事が出来る時代に、このように人と人とが介して語り合うことは、どこか新鮮ささえあります。画面越しや文面ではなく、当事者と顔を合わせて話し合うことで、本の体験や価値観をより実感する事ができるのではないのでしょうか。今回のヒューマンライブラリーに本として参加して下さった方の多くは、社会的に見ればマイノリティといわれている方々でした。マイノリティとされる方々への差別や偏見が存在しているということは、知識としては知っています。しかし、その実情は知っているのでしょうか。どこか自分から遠い問題となつてはいないのでしょうか。ヒューマンライブラリーはそういった意識を変える一助になると思います。

ヒューマンライブラリーの発案者である Ronni Abergel 氏は「本を表紙だけで判断してはいけない」というメッセージを発信し続けています。私は今回のヒューマンライブラリーを通して、「判断できない」ののではないかとさえ思いました。話してみなければわからないことは、山ほどあります。知らないままだと軋轢を生むかもしれません。知らず知らずのうちに誰かを傷つけているかもしれません。多様性が重視される現代において、ヒューマンライブラリーの重要性は増していると感じます。

東京学芸大学でのヒューマンライブラリーも今回だけのものではなく、恒例といえるほどに長く続けていければと思います。

2017年度は、第1回目の反省を生かし、5月段階から説明会を開き、6月にクルド難民とXジェンダー、視覚障がい者を招いてヒューマンライブラリー体験会を行った。この過程で、4名の学生がスタッフになってくれた。また、5月の国際交流合宿でも初めて、夜の時間帯に、参加者が15冊の「本」になって、それぞれの人生の体験や異文化体験、自分の国での話などを語り合うヒューマンライブラリーを行った。また、6月の異文化間教育学会で、第1回のHLの報告を行い（岡2017,岡2018）、10月の日本ヒューマンライブラリー学会の立ち上げに理事として関わることになった。

10月の開講後は、多文化共修Bの学生にも呼びかけたが、受講者数自身が少ないこともあってか、スタッフになってくれた人は1人だけだった。今回は学生中心の実行委員会になり、「本」の設定や、読み合わせなどを行っていった。当日、「本」は16冊、スタッフ10名、読者55名と外部からの読者が倍増して、受付時間でさばききれないほどになった。「本」は、クルド難民、イスラム教徒留学生、ろう者、視覚障がい、双極性障害、Xジェンダー、ゲイ、性同一性障害、地域の外国人支援者、子ども食堂経営者、学習支援者などである。今回参加してくれた「本」には、昨年授業を受講しスタッフになってくれた学生もいた。5月の国際交流合宿でも「本」になってくれたので今回続けて依頼した。今回授業参加者で、読者として参加した学生と、スタッフになった学生の感想文の一部を紹介する。

ヒューマンライブラリーに参加するのは、今回が初めてです。以前にもこんな形の「図書館」を聞いたことがありません。すごく新鮮でいい体験でした。

中国にはヒューマンライブラリーがないと思っていましたが、インターネットで調べてみると、2008年12月16日に上海交通大学で行われた初めての「真人图书馆(Living Library)」から、全国でヒューマンライブラリーは約三十五回行われました。中国に比べてみると、日本のほうが多いかもしれないと思います。

実は参加した前に、私はこんな活動を行う意義がよく分かりませんでした。どうして彼らの障がい者に自分の肉体や精神的な痛みを何回も繰り返し言わせるのかと悩んでいました。残酷ではないかと思っていました。しかし、何人かの「個性の本」を読んだ後、こんな交流活動の遣り甲斐がだんだん分かりました。これはあくまで私の個人的な考えですけど、お互いに話し合ったり理解を進めたりすることが、ヒューマンライブラリーの目的でしょう。

我々普通人間と障がい者や社会的マイノリティを抱える人との交流だけではなく、一部分の同じ体験が似ていた体験があって、迷っていて悩んでいる人と彼らとの交流もできるのです。特に、後者に対して、ヒューマンライブラリーは絶妙な場所だと思います。人生経験が類似している同士は、ここに集まって、普通の時に言い出せないことが、世間を憚らないで言い出して、お互いに精神的な力や理解やアドバイスなどのものを

得ることが、できるのです。

万里さんの「Xジェンダー」の本を読んだとき、山梨県からわざわざ来た読者もいました。彼女は朝、偶然にNHKニュースに出てきた学芸大で行われるヒューマンライブラリーについての放送を聞いて、思い切った電車でここに来ました。「往復はたぶん五千円ぐらいかかります……」、彼女が恥ずかしそうに笑ってそう言いました。彼女も自分の本当な性別を悩んだことがあるそうです。化粧をしたりミニスカートを着たりすると、違和感が持っているそうです。

加えて、万里さんは、私たちXジェンダーの人に、性別にかかわらず、ただの一人の人間と見てくれないかと感慨深そうに言いました。その山梨県の読者も、自分の性別には関係がなくて、肉体関係がなくて、ただの自分自身が愛してくれないのかと言いました。私も彼らの言葉を聞いて、すごく感動されているいろいろ考えていました。

今回のヒューマンライブラリーを通して、私もいろいろ勉強できて、自分の生命の貴重さや自らの存在の価値への理解が深められました。私は、この社会のマジョリティの中の一人として、クルド人難民のようではなく、国籍を持ってある国に所属して、社会保障を享受しているし、障害もないし、異様な目をされる場所に心配することがないし、何か理由があって今の生活を大切にしないのですか。理由がないでしょう。

私は、このヒューマンライブラリーに、生命の価値や生きている意義を深く意識させられました。人間はどういうものですか。どういう存在ですか。新たな認識ができました。

ヒューマンライブラリーのスタッフとして参加させていただきました。最初のきっかけは岡先生の授業で募集していて、「今までにやったことないことに挑戦してみたい」という軽い気持ちから始めてしまいました。実際に、「本」となる人たちの話を聞いてみると今まで出会うことのできなかった興味深い話ばかりで驚きました。読者の方も、テレビをみて遠くから訪れていただいた方や他大学から来た人たちとたくさんの方に来ていただきました。スタッフとしては自分が何してよいかわからず、戸惑うことが多く周りにご迷惑をたくさんかけてしまい申し訳なかったです。当日にはタイムキーパーの仕事ミスしてしまい、本の方々にご迷惑をおかけして申し訳なかったです。来年度はもう少し事前のスタッフ会議なるべく当日のシュミレーションをできると良いかなと思います。

スタッフとして、事前に打ち合わせでお話を聞いていた堀口さんと中野さんの予約が埋まって、たくさんの人たちが話を聞いている姿をみるとなんだか私も嬉しい気持ちになりました。特に、堀口さんは交流会や始まる前の説明のサポート役(パソコンやホワイトボードを用いての会話)を担当させていただきました。堀口さんは耳が聞こえないのに、本当にユーモアあふれる方で、とても楽しませていただきました。岡先生の授業のゲストスピーカーとしてたびたびお話しされているそうなので、機会があればもって皆さまに話を聞いてほしいなとおもいます!交流会では中央大の学生なども交えて交流し、とても楽しかったです。もう一人事前に打ち合わせでお話しをした教育支援者の中野さんも自分よりも1つ学年は下なのに、本当に行動力にあふれた学芸大生でとても刺激を受けました。スタッフを始めた時期が遅かったためお二人のお話ししか事前

に打ち合わせできなかったのですが、もっと早く始めればよかったなと思いました。

ヒューマンライブラリーでは普段あまり知り合う機会の少ない人々のお話を聞くことのできるイベントだと思います。まだ、なかなか学芸大生の参加が少なく、どう人数を増やすかという課題があると思います。もっと、多くの学芸大に参加してもらいたいと心から思います。教員を目指す人には、マイノリティーの人の話や教育支援者のお話を聞ける機会として、特に参加して欲しいイベントだな、と個人的には感じました。読者としてお話をきいた、教育支援者のこぼやしさんと長谷川さんのお話は実際教員を目指す私にはとても興味深いお話しでした。「教員をめざすのがスタンダード」と考えがちな学芸大学の学生に学芸大学の卒業生として別の道を歩んでいる姿はとても興味深いと思います。今回、スタッフとして参加していて、聞くことができなかった「本」の方々の話も今度は読者として参加してぜひ聞いてみたいと思いました！それと、来年はもっとたくさんの、色んな人たちに是非スタッフをやってみてほしいと思いました。来年度はもっとたくさんの「本」の方たちをもっとたくさんの「読者」の方たちが来ると良いなと思います。

詳しくは、第1回、第2回の報告書を見ていただきたいが、ヒューマンライブラリーは、参加する「読者」の多文化、多様性理解のための最高のイベントであるだけでなく、スタッフとなる「司書」の学生の成長にとっても非常に意義のあるものであることが感想などから理解していただけるだろう。

2018年度春学期は体験会は開催できなかったが、多文化共修科目Aの受講者で、川口HLや早稲田大HLに参加した学生があり、5月の国際交流合宿でも、参加者10冊を「本」にしたヒューマンライブラリーを開催された。2018年は12月16日(日)に第3回東京学芸大学ヒューマンライブラリーの開催が決定している。実行委員会立ち上げが遅れているが、8月末日現在12冊の本が決定し、動き出している。10月の開講を待って学生たちへの呼びかけ、実行委員会の立ち上げから本格的な宣伝などが始まる。新しい多文化共修授業でも、このヒューマンライブラリーの参加を課外活動として積極的に位置づけ、学生たちの多様性理解の助としたいと考えている。

6. 今後の課題

稿者にとっては、多文化共修科目はただの授業ではない。多文化共生社会に向けた拠点的活動である。留学生センターで続けている国際交流活動(国際交流合宿、国際交流カフェ、にほんごカフェ)や、多様性理解の一大イベント「ヒューマンライブラリー」とも連携しながら、大学を多文化共生教育の拠点としていきたい。また、2019年度は、地域の外国人支援との連携、新大学院での多文化共生教育人材の養成へと活動を広げ、多文化社会コーディネーターとしての力量を高めていきたい。

大学全体としては、内なる国際化や、多様性の理解を深めるために、全学的に共修授業を増やしていくことが必要だろう。その

ためのカリキュラムなどの制度的改革も必要となるだろう。そのためにも、多くの人の相互理解と協働が必要となるだろう。

参考文献

- 岡 智之 (2016a) 「多文化共修科目の挑戦：2015年春学期「異文化理解とコミュニケーション」の授業実践と振り返り」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ 第67集』
- 岡 智之 (2016b) 「多文化共修科目における異文化理解とコミュニケーション促進の効果～多文化共生キャンパス実現に向けた取り組み～」『2016年度異文化間教育学会第37回大会発表抄録』 pp.118-119.
- 岡 智之 (2017) 「全学的取り組みとしてのヒューマンライブラリー実践報告—多文化共修科目の取り組みとも合わせて—」『2017年度異文化間教育学会第38回大会発表抄録』pp94-95
- 岡 智之 (2018) 「ゼミのない大学でのヒューマンライブラリーの作り方」坪井健・横田雅弘・工藤和宏編著『ヒューマンライブラリー—多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究』明石書店、pp40-41.
- 坂本利子・堀江未来・米澤由香子編著 (2017) 『多文化間共修—多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社
- 末松和子 (2018) 「カリキュラム国際化と国際共修：留学生と国内学生の学び合いをデザインする—第38回研究大会公開シンポジウムの報告を中心に—」『異文化間教育 47』異文化間教育学会、pp.68-84.
- 田淵五十生 (2013) 「日本の外国人の抱える問題」加賀美登美代編著『多文化共生論』明石書店
- 『まんが クラスメイトは外国人—多文化共生20の物語』明石書店、2009
- 報告書(岡智之 HP <http://www.u-gakugei.ac.jp/~gangzhi/> 参照)
- 第1回東京学芸大学ヒューマンライブラリー報告書、2017年2月
- 第2回東京学芸大学ヒューマンライブラリー報告書、2018年1月
- 2017 国際交流合宿 in 草津温泉 報告書(留学生センターHP)
- 2018 国際交流合宿 in 清里高原 報告書(留学生センターHP)
- ロヒンギャ難民集住地・館林市訪問 報告書、2018年6月